松山市文化財調査報告書 201

五郎兵衛谷７号墳

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

２０２１

松 山 市 教 育 委 員 会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

五郎兵衛谷７号墳

（ごろべえだに）

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

２０２１

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　調査地を上空より望む（南より）

巻頭図版２　五郎兵衛谷７号墳全景（南より）

序　　言

本書は、平成10～11年度に国庫補助事業として実施した五郎兵衛谷７号墳の発掘調査告書です。

五郎兵衛谷７号墳が所在する鷹ノ子地区の丘陵部には古墳が多数確認されています。南側の隣地では昭和52（1977）年に1～6号墳の調査が実施され、6世紀末～7世紀初頭の葬制が明らかにされました。今回の調査では、古墳１基の調査ではありましたが、石室内からは鉄製品や装飾品などの副葬品が出土したほか、石室や墳丘の構築課程を復元することができました。

本書が、埋蔵文化財研究の一助となり、さらには文化財保護及び生涯学習の推進に寄与できることを願います。

最後に、発掘調査及び報告書刊行に際しご協力いただきました地権者をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

松山市教育長

藤田　仁

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会が国庫補助をうけて、1998（平成10）年8月25日から1999（平成11）年6月30日の間に実施した、松山市鷹子町乙402-5に所在する五郎兵衛谷7号墳の埋蔵文化財調査報告書である。

2．本書の刊行を目的とした整理作業は、財団法人松山市文化･スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという）が松山市教育委員会より委託を受けて令和元年度～令和2年度にかけて実施した。なお、出土物整理作業として国から補助を受けている。

3．本書で使用した標高値（H）は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標（世界測地系）を基準とした真北である。基準点測量は国際航業株式会社に委託した。

4．屋外調査での写真は調査担当である小笠原彰のほか、（株）セットアップが撮影を行った。報告書作成に関わる遺物写真は、大西朋子が担当した。

5．本書に掲載した遺構図、遺物実測図の縮尺は縮分値をスケール下に表記した。

6．本書の執筆・編集は、相原浩二が行った。執筆にあたっては、基本的に概要報告・年報に掲載された文章や図面を参考にし、一部については加筆や修正を行った。遺物の復元及び実測・製図は原冨美、紺田明日香、越智田美紀が行った。

7．本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

8．報告書抄録は、巻末に記載している。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに…… **1**
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　調査の経過…… 2
第３節　組織…… 2

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境…… **4**
第１節　遺跡の立地…… 4
第２節　歴史的環境…… 6

第Ⅲ章　遺構と遺物…… **9**
第１節　遺構…… 9
第２節　出土遺物…… 15

第Ⅳ章　分析…… **27**

第Ⅴ章　小結…… **35**

挿図目次

第Ⅰ章　はじめに
第 1 図　調査地位置図 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境
第 2 図　松山平野の地形概要図 …… 4
第 3 図　調査地と周辺の遺跡 …… 5
第 4 図　調査地と五郎兵衛谷古墳１～６号位置図 …… 6
第Ⅲ章　遺構と遺物
第 5 図　調査前の地形測量図 …… 9
第 6 図　五郎兵衛谷７号墳全測図 …… 10
第 7 図　五郎兵衛谷７号墳墳丘土層図 …… 11
第 8 図　石室測量図 …… 12
第 9 図　玄室測量図 …… 13
第 10 図　羨道部・墓道部土層測量図 …… 14
第 11 図　玄室内出土遺物位置図 …… 16
第 12 図　玄室内出土遺物実測図（1） …… 18
第 13 図　玄室内出土遺物実測図（2） …… 19
第 14 図　墳丘・表採遺物位置図 …… 21
第 15 図　墳丘・表採遺物実測図（1） …… 22
第 16 図　墳丘・表採遺物実測図（2） …… 23

表 目 次

表 i　調査地一覧 …… 2
表 1　出土遺物観察表　鉄製品 …… 24
表 2　出土遺物観察表　装身具（耳環） …… 25
表 3　出土遺物観察表　装身具（玉類） …… 25
表 4　出土遺物観察表　土製品（1） …… 25
表 5　出土遺物観察表　土製品（2） …… 26

写真図版目次

巻頭図版

図版 1　調査地を上空より望む（南より）
図版 2　五郎兵衛谷７号墳全景（南より）

写真図版

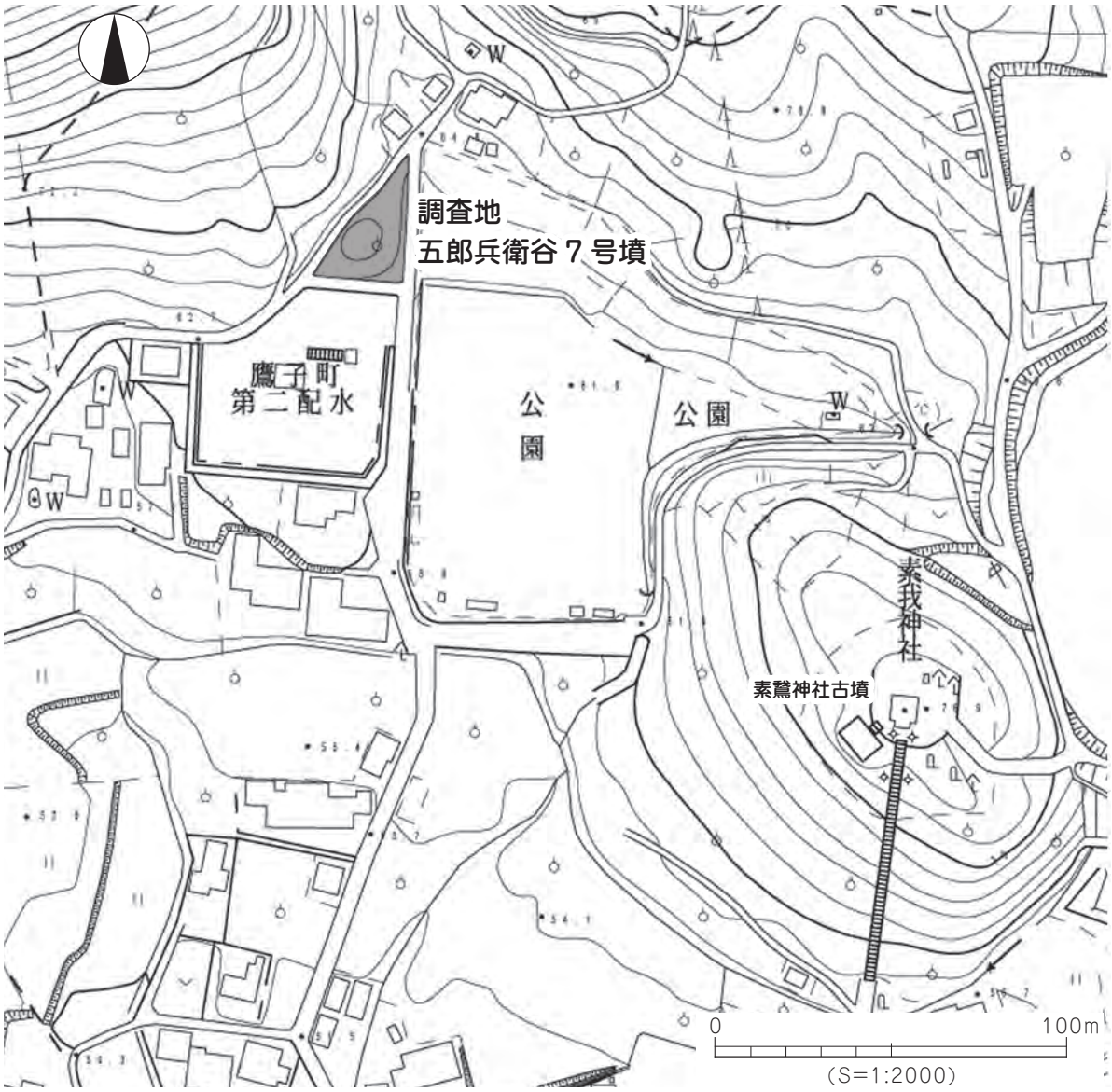
図版 1　1. 調査地遠景(北東より)
2. 調査前状況(北より)
3. 表土及びトレンチ掘削状況(南より)
図版 2　1. 作業風景(東より)
2. 北西部周溝検出状況(西より)
3. 北西部周溝掘削状況(西より)
図版 3　1. 墳丘北東部掘削状況(北東より)
2. 墳丘部土層堆積状況(東より)
3. 墳丘東側土層堆積状況(西より)
図版 4　1. 墓坑南西部検出状況(南より)
2. 墓坑埋土堆積状況(南より)
3. 墓坑東側検出状況(南より)
図版 5　1. 石室検出状況(北より)
2. 石室内掘り下げ状況(北より)
3. 頭骨出土状況(北より)
図版 6　1. 耳環出土状況(南より)
2. 玄室床面検出状況(南より)
図版 7　1. 床面検出状況(北より)
2. 礫の堆積状況(北より)
図版 8　1. 羨道部入口の土層堆積状況(南より)
2. 羨道部検出状況(南より)
3. 羨道部入口の須恵器出土状況(南より)
図版 9　1. 玄室完掘状況(北より)
2. 羨道部完掘状況(南より)
図版 10　1. 石室・墓道完掘状況(南より)
2. 五郎兵衛谷７号墳全景(南より)
図版 11　1. 玄室内出土遺物(1～6・8～21)
図版 12　1. 刀子に付着する囲蛹殻(いようかく)と布(3･4･14)
図版 13　1. 玄室内出土遺物(22)、墳丘･表採遺物(23～32)
図版 14　1. 墳丘・表採遺物(33～46)

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

五郎兵衛谷古墳群は、松山平野の東部、高縄山系が南西にのびる丘陵裾部に位置する。この高縄山系の南西面は丘陵支群ごとに西から東野、久米・鷹子、平井、小野谷、播磨塚と群集墳が支群を成して密集する地域となっている。五郎兵衛谷古墳が所在する鷹子の丘陵部は愛媛県教育委員会による分布調査で、11 基の古墳が確認されている。そのうち、昭和 52（1977）年には市教委により１～６号墳の調査が実施され、６世紀末～７世紀初頭における群集墳の葬制が明らかにされている。これらの古墳は 10m 内外の円墳で、特に１号墳に三累環頭太刀が副葬されていたことが注目されている。

平成９（1998）年 10 月、松山市埋蔵文化財包蔵地「№93　鷹子古墳、五郎兵衛谷古墳」（平成 27



第１図　調査地位置図

年修正、現在は包蔵地外）内における農地造成に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（現在の文化財課。以下、市教委という）に提出された。申請地は、「五郎兵衛谷７号墳」として既に周知されている古墳である。試掘調査によって古墳の墳丘盛土を確認した結果を受け、市教委と申請者による協議が行われ、農地造成によって失われる当古墳について記録保存で対応することとなり、1999（平成 10）年 8 月 25 日に国庫補助を受けて市教委が主体となり平成 10 年度と 11 年度にかけて発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

今回の調査は、既に周知されている「7 号墳」において農地造成に先立ち国庫補助を受けて実施した。調査はまず、墳丘の遺存状況を確認し、墳丘断面の観察から墳丘造成の工程を把握することに努めた。その過程で追葬墓道と見られる掘り方の検出等、当古墳が追葬行為の痕跡を残す貴重な古墳であることが確認された。そこで、追葬等の葬送儀礼にまつわる痕跡を残す石室前庭部と墓道の調査及び石室の構造の解明に努めるために、引き続き平成 11 年度においても調査を実施した。

出土物整理作業及び報告書刊行作業は、松山市教育委員会が公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団に委託して実施した。以下、表ｉに本書に掲載する遺跡名・所在地・調査面積・屋外調査期間・出土物整理作業・報告書刊行作業期間を記した。

表ｉ　調査地一覧

遺跡名	所在地	調査面積	屋外調査期間	出土物整理作業 報告書刊行作業
五郎兵衛谷７号墳	鷹子町乙 402 番 5	491㎡	1998（平成 10）年 8 月 25 日～ 1999（平成 11）年 6 月 30 日	（出土物整理作業） 2019（平成 31）年 4 月 1 日～ 2019（令和元）年 10 月 31 日 （報告書刊行作業） 2020（令和 2）年 4 月 1 日～ 2020（令和 2）年 11 月 30 日

第３節　組　織

（1）調査組織

平成 10 年度調査組織（平成 10 年 4 月 1 日時点）
松山市教育委員会
教育長　池田　尚郷
事　務　局　局　長　大野　嘉幸
次　長　岩本　一夫
次　長　丹下　正勝

平成 11 年度調査組織（平成 11 年 4 月 1 日時点）
松山市教育委員会
教 育 長　池田　尚郷
事　務　局　局　　長　團上　和敬
次　　長　森脇　　將
次　　長　赤星　忠男

文化教育課	課　長	松平　泰定
	係　長	西尾　幸則
	臨　時	政本　和人（調査担当）

文化教育課	課　　長	松平　泰定
	課長補佐	馬場　　洋
	係　　長	三好　清二
	係　　長	重松　佳久（調査担当）
	臨　　時	小笠原　彰（調査担当）

（2）整理・編集・刊行組織

平成 31 年度出土物整理組織（平成 31 年 4 月 1 日時点）

松山市教育委員会

	教育長	藤田　　仁
事　務　局	局　長	白石　浩人
	次　長	髙田　　稔
	次　長	重松　一禎
文 化 財 課	課　長	渡部　浩典
	副主幹	楠　　寛輝
	主　任	山内　英樹

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

	理事長	本田　元広
事　務　局	局　長	片山　雅央
	次　長	大野　昌孝
施設管理部	部　長	片上　俊哉
埋蔵文化財センター	所　長	梅木　謙一
考　古　館	館　長	梅木　謙一
	主　任	相原　浩二（整理担当）

令和 2 年度報告書編集・刊行組織（令和 2 年 4 月 1 日時点）

【刊行組織】

松山市教育委員会

	教育長	藤田　　仁
事　務　局	局　長	矢野　博朗
	次　長	重松　一禎
	次　長	西村　秀典
文 化 財 課	課　長	渡部　浩典
	副主幹	楠　　寛輝
	主　任	山内　英樹

【編集組織】

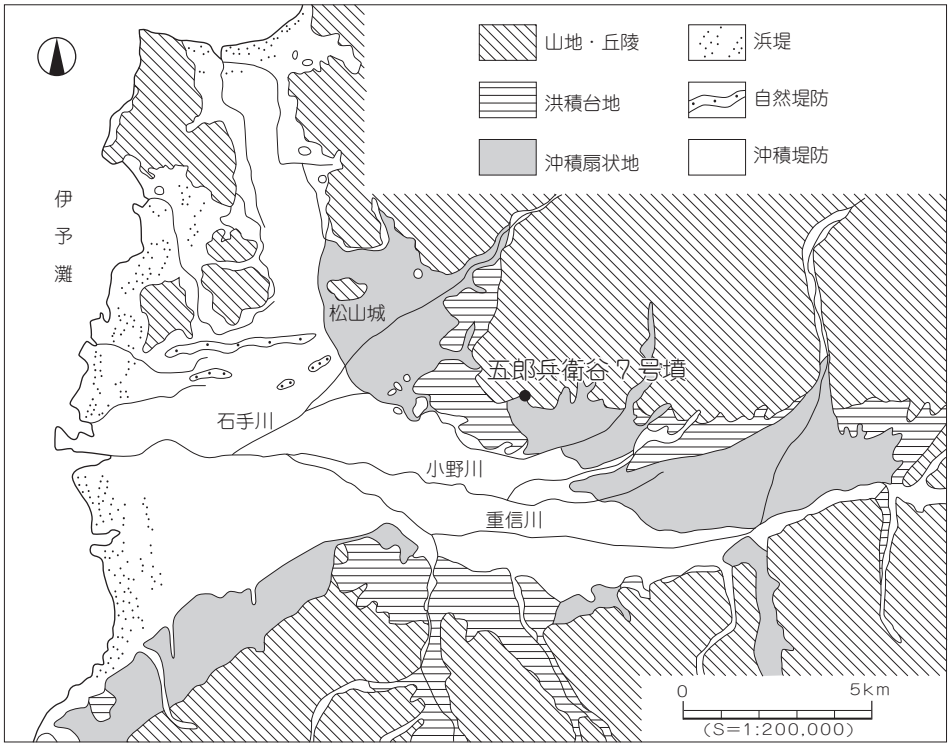
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

	理事長	本田　元広
事　務　局	局　長	片山　雅央
	次　長	杉野　公典
文化振興部	部　長	片上　俊哉
埋蔵文化財センター	所　長	梅木　謙一
考　古　館	館　長	梅木　謙一
	主　任	相原　浩二（編集担当）

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地

松山平野は、東は山地を背にして西は瀬戸内海に開ける。平野の北東部は、高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西斜面に接し、南東部から南西部にかけては四国山地の北斜面に接する。平野は、主に高縄山系に源を発する石手川や重信川などで形成された複合扇状地堆積物と沖積低地や浜堤などで形成されている。五郎兵衛谷古墳が所在する鷹子町の丘陵部は平野の北東部、高縄山系の南面を形成する支脈の丘陵裾部に位置する。この高縄山系の南西面は西から東野古墳群、久米・鷹子古墳群、平井古墳群、小野谷古墳群、播磨塚古墳群と古墳群が支群を形成して密集する地域となっている。五郎兵衛谷古墳はこのうちの久米・鷹子古墳群内にあり、標高 64m に所在する。



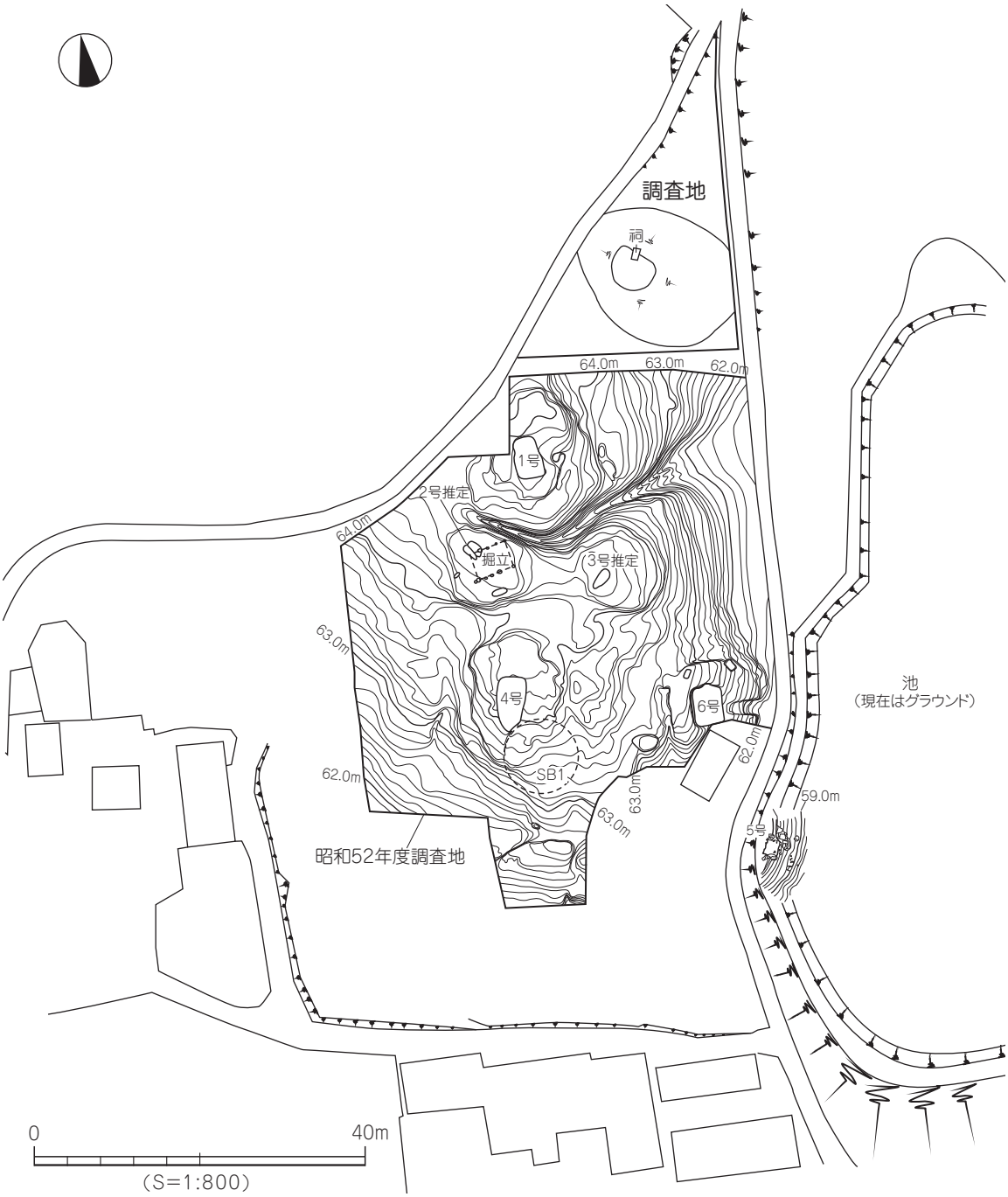
第２図　松山平野の地形概要図

1 ： 素鷲神社古墳
2 ： 桧山峠７号墳
3 ： かいなご３号墳
4 ： 芝ケ峠１号墳
5 ： 北久米二ツ塚古墳
6 ： タンチ山古墳（双子塚）
7 ： 鶴塚古墳
8 ： 波賀部神社古墳
9 ： 福音小学校構内遺跡
10：北久米遺跡３次
11：北久米遺跡７・８次
12：北久米町屋敷遺跡１・２次
13：南久米北野遺跡
14：南久米遺跡１次
15：久米才歩行遺跡１次
16：久米才歩行遺跡２次
17：久米才歩行遺跡５次
18：南久米片廻り遺跡１次
19：南久米片廻り遺跡２次
20：久米高畑遺跡５次
21：久米高畑遺跡 24・25 次
22：久米高畑遺跡 35 次
23：久米高畑遺跡 67・68 次
24：今在家遺跡
25：来住廃寺 13 次
26：来住廃寺 18 次
27：来住廃寺 30・31 次
28：来住町遺跡８次
29：中ノ子Ｉ遺跡
30：開遺跡１次
31：鷹子町遺跡２次
32：鷹子新畑遺跡１次
33：久米窪田森元遺跡１次
34：久米窪田森元遺跡４次
35：久米窪田森元遺跡５次
36：久米窪田古屋敷遺跡
37：平井遺跡３～９次
38：平井遺跡２次
39：水泥遺跡１次
40：水泥遺跡２次
41：水泥遺跡３次
42：高井遺跡１次
43：南高井遺跡２次
44：南高井遺跡３次
45：下刈屋遺跡１次
46：下刈屋遺跡２次
47：下刈屋遺跡３次
48：古市遺跡１次
49：古市遺跡２次
50：五楽遺跡２次
51：五楽遺跡３次
52：平井谷１号墳
✪：五郎兵衛谷７号墳

第３図　調査地と周辺の遺跡

第２節　歴史的環境

調査地周辺の丘陵は古墳の密集する地域で、当古墳の属する鷹子古墳群をはじめとして、桧山峠古墳群、かいなご古墳群、久米大池古墳群など、その総数は数百基にのぼると考えられている。ここでは、五郎兵衛谷古墳と周辺域の調査された古墳を中心に概観することとする。



第４図　調査地と五郎兵衛谷古墳１～６号位置図

五郎兵衛谷古墳と名の付く古墳は、愛媛県教育委員会による分布調査によって 11 基の古墳が確認されている。調査地南側の隣地では、昭和 52（1977）年に鷹子第二浄水タンク建設に伴い市教委により五郎兵衛谷古墳群として調査が実施されている。見つかった遺構は戦前・戦後の果樹園などの開発によって壊滅的なダメージを受けていたものの、1 ～ 6 号墳の調査が実施されたほか、弥生時代中期末葉の竪穴建物 1 棟などが見つかっている。1 号墳は埴輪を伴う直径 10m ほどの円墳で周溝を伴う古墳である。主体部は基底石を抜き取られ、基底石の痕跡を検出したのみであるが、その抜取り痕跡より片袖式の横穴式石室を想定している。遺物は石室内より鉄鏃、鉄鉾、刀子、三累環頭大刀、耳環、丸玉などが出土している。2 号墳、3 号墳は主体部の確認には至らず、墳丘規模等についても不明である。遺物は須恵器が出土している。4 号墳も破壊の程度が著しく底石もほとんど抜き取られているが、地山面を掘り込んだ墓坑と床面の敷石を検出している。主体部は床面の検出状況から横穴式石室が考えられている。遺物は須恵器が出土している。5 号墳は新池（現在は埋め立てられている）の法面で半壊した横穴式石室で石室内より耳環が 1 点出土している。6 号墳も石材は抜き取られ、墓坑と床面がわずかに検出されている。主体部は、検出状況から竪穴式石室が想定されている。遺物は須恵器が出土しており、そのうち 1 点は非陶邑系須恵器である。竪穴建物は円形で直径 6.5m を測る。付帯施設として周壁溝、主柱穴、炉址を検出している。

ここで周辺の古墳を概観すると、北東 1.0km には送電線鉄塔関連で調査が行われた桧山峠 7 号墳の調査が行われている。遺物の出土状況から前方後円墳と考えられており、全長は不明ながら後円部の直径が 17m を測る。主体部は竪穴式石室で埴輪は伴わない。遺物は石室内より鉄鏃、刀子、轡、ガラス小玉が出土し、くびれ部相当から須恵器が出土している。時期は、出土須恵器の形態より 5 世紀後半～末と考えられている。同じく北東 2.0km には送電線鉄塔関連の調査として平井谷 1 号墳の調査が行われている。7 世紀初頭～中頃の横穴式石室で追葬行為に伴う死床区画の良好な例として知られている。芝ケ峠古墳群中の 1 号墳は久米 80 号墳とも呼ばれ、一墳丘に 2 基の石室が開口しており、6 世紀後半代のものと考えられている。南 650m にはタンチ山古墳（双子塚）がある。太平洋戦争中、滑走路の建設時に消滅した前方後円墳といわれる古墳である。南側に開口する石室を主体部に持ち、石棚を有する瓢箪形の古墳といわれ、出土遺物には銀製空玉、鉄槍などがある。タンチ山古墳については平成 4（1992）年に推定地近辺における個人住宅の建設に伴って調査が行われている。調査では円筒埴輪や盾形埴輪が出土したものの、位置関係を明確にすることはできなかった。しかしながら、調査地点を前方部の外周土手として古墳の推定復元を試みている。それによれば、周溝を伴う前方後円墳で推定墳長は 65m（周溝は含まない）、後円部推定直径 46m で松山平野では最大級の古墳に推定されている。南東 1.3km には平成 30 年に調査が行われた鶴塚古墳がある。埋葬施設は完全に失われていたが、検出した周溝の形より前方後円墳であることが確認された。規模は全長 42.5m、墳長 35.0m、周溝幅 1.80 ～ 5.30m を測る。遺物は周溝埋土より土師器、須恵器、埴輪が出土している。埴輪は盾形埴輪のほか石見型埴輪が出土している。このほか、古墳とは関係しないが後円部には古墳築造前の弥生時代の遺物包含層が残っており、包含層中からは弥生時代中期末葉頃の在地の土器とともに備後や安芸地方と考えられる注口土器のほか、地山直上でナイフ形石器 1 点が出土しており古墳以外にも注目される遺跡である。

このほか、首長クラスの古墳としては、未調査ではあるが東方 1.2km の観音山古墳や、東方 300m にある円墳とされる素鵞神社古墳がある。両者とも形象埴輪を伴い観音山古墳では五鈴鏡、素鵞神社

古墳では単鳳文環頭太刀の出土が伝えられている。

以上、古墳について概観してきたが、五郎兵衛谷古墳から眼下に見下ろす小野川と堀越川にはさまれた来住舌状台地と呼ばれる洪積台地には、近年の継続的な調査により、久米「国造」制から「評」制、さらに「郡」制への官衙関連施設造営の変遷が明らかになってきていることや、久米地域の低丘陵上に古墳時代の大規模集落が造営されていることから見ても、久米国造制の発達段階と大きくかかわり合いを持つ古墳群であることが指摘されている。

[参考文献]

松山市教育委員会　1980　『松山市史料集　第１巻　考古編』

松山市教育委員会　1987　『松山市史料集　第２巻　考古編』

西田栄･森光晴･岡田敏彦ほか　1991　「Ⅱ　愛媛県内古墳分布の特色」『愛媛県内古墳　分布調査報告書』愛媛県教育委員会

森　光晴　1978　『五郎兵衛谷古墳』松山市教育委員会

栗田茂敏　1997　『桧山峠７号墳』松山市教育委員会･財団法人松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター

吉岡和哉　2001　『播磨塚天神山古墳』松山市教育委員会･財団法人松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター

重松佳久　2009　『タンチ山（双子塚）古墳』松山市教育委員会･財団法人松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター

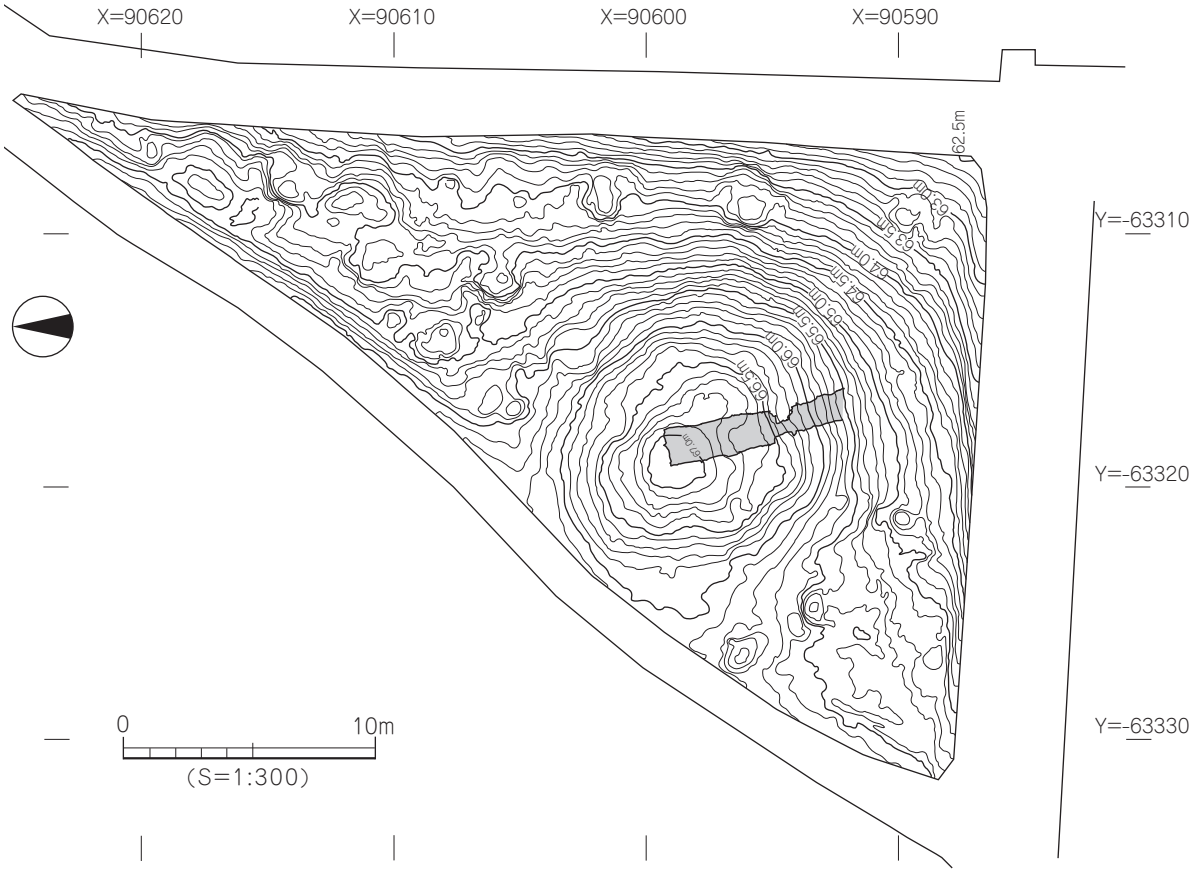
第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　遺構

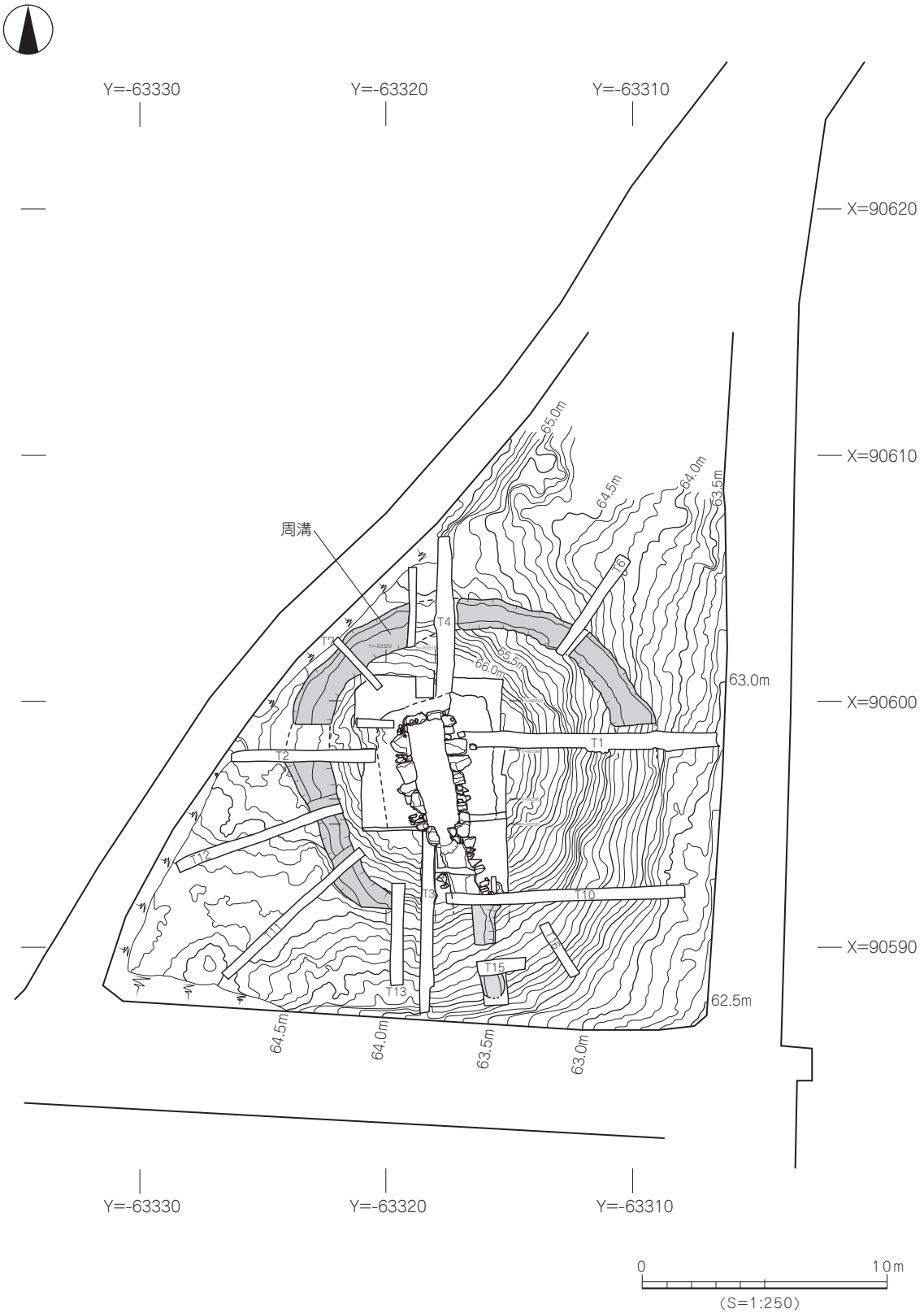
平成 10 年度の墳丘盛土のトレンチ調査の結果、五郎兵衛谷７号墳は石室や周溝などを確認し、直径約 13m の円墳と考えられた。トレンチ土層の断面観察からは、石室石材を被覆する裏込土や盛土のほか、墳頂部付近にも現代の撹乱層などを確認し、石室の損壊状況をある程度把握することができていた。11 年度の石室の調査は、遺存している石室壁体上面まで掘削したあと、石室内に埋まっている土と隙間なく崩落した壁体を丁寧に除去しながら掘削を進めた。天井石と思われる大型の石材は検出されなかった。以下、見つかった遺構について記す。

（１）墳丘と墓坑

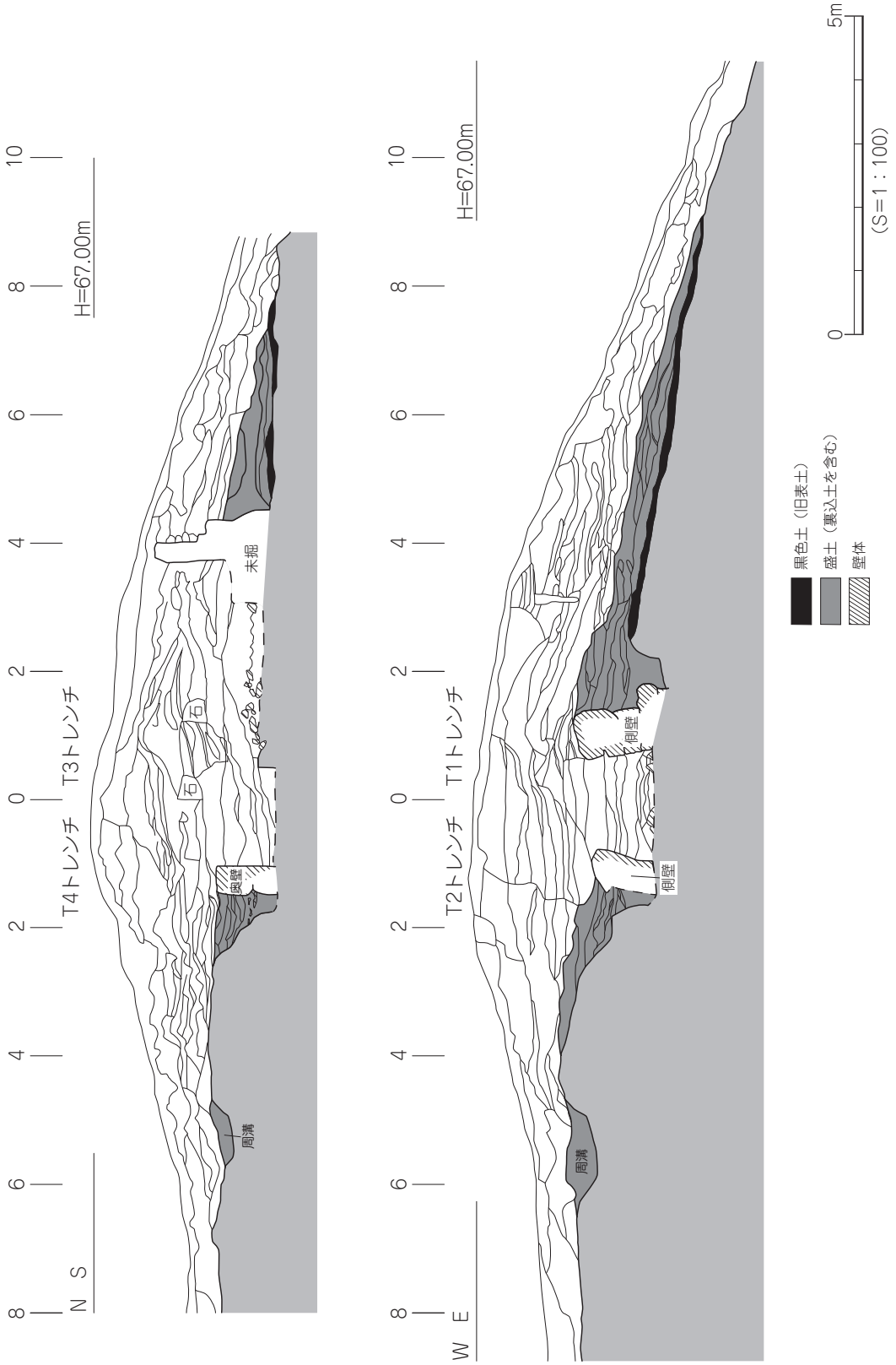
調査区の地形は南東方向に緩やかに傾斜して下る。まず、傾斜している地山層に水平を意図した基盤造成が行われる。墓坑の掘り方はこの基盤造成面からであることから、基盤造成後に墓坑掘削が行



第５図　調査前の地形測量図



第６図　五郎兵衛谷７号墳全測図



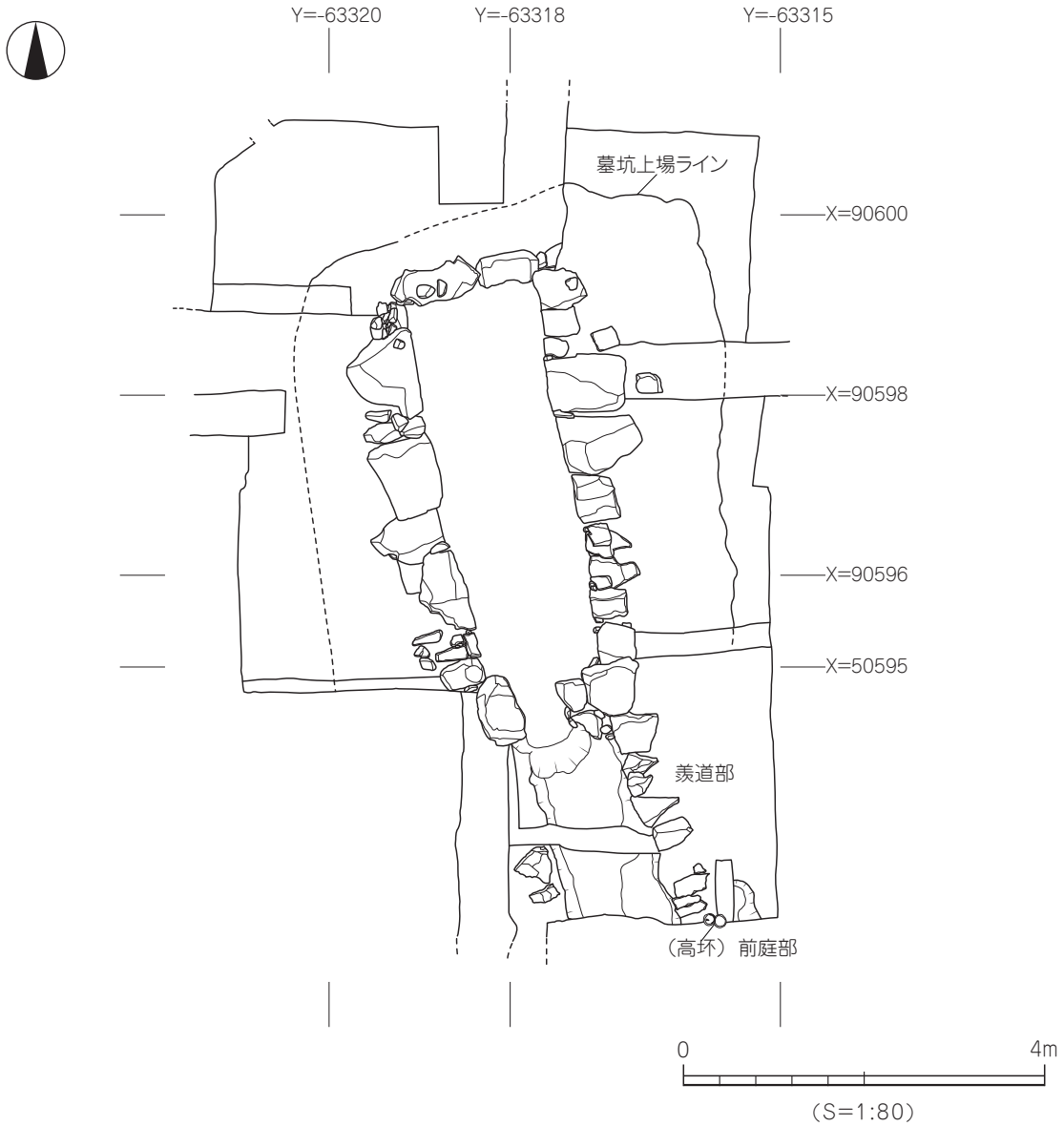
第７図　五郎兵衛谷７号墳墳丘土層図

われている。その次に基底石と１～２段の石材を積み、墓坑を粘土質の土で埋め戻し石室の基礎を安定させる。さらに上部の石材を築いていく過程と並行して、それを被覆するように塚状に封土を盛る。同時に層状に裾部に向けて盛土を行い墳丘を形成する。最後に周溝が掘削される。石室石材とそれを被覆する盛土はいくつかの単位を読み取ることが可能であり、その工程は単位ごとに繰り返し行われている。

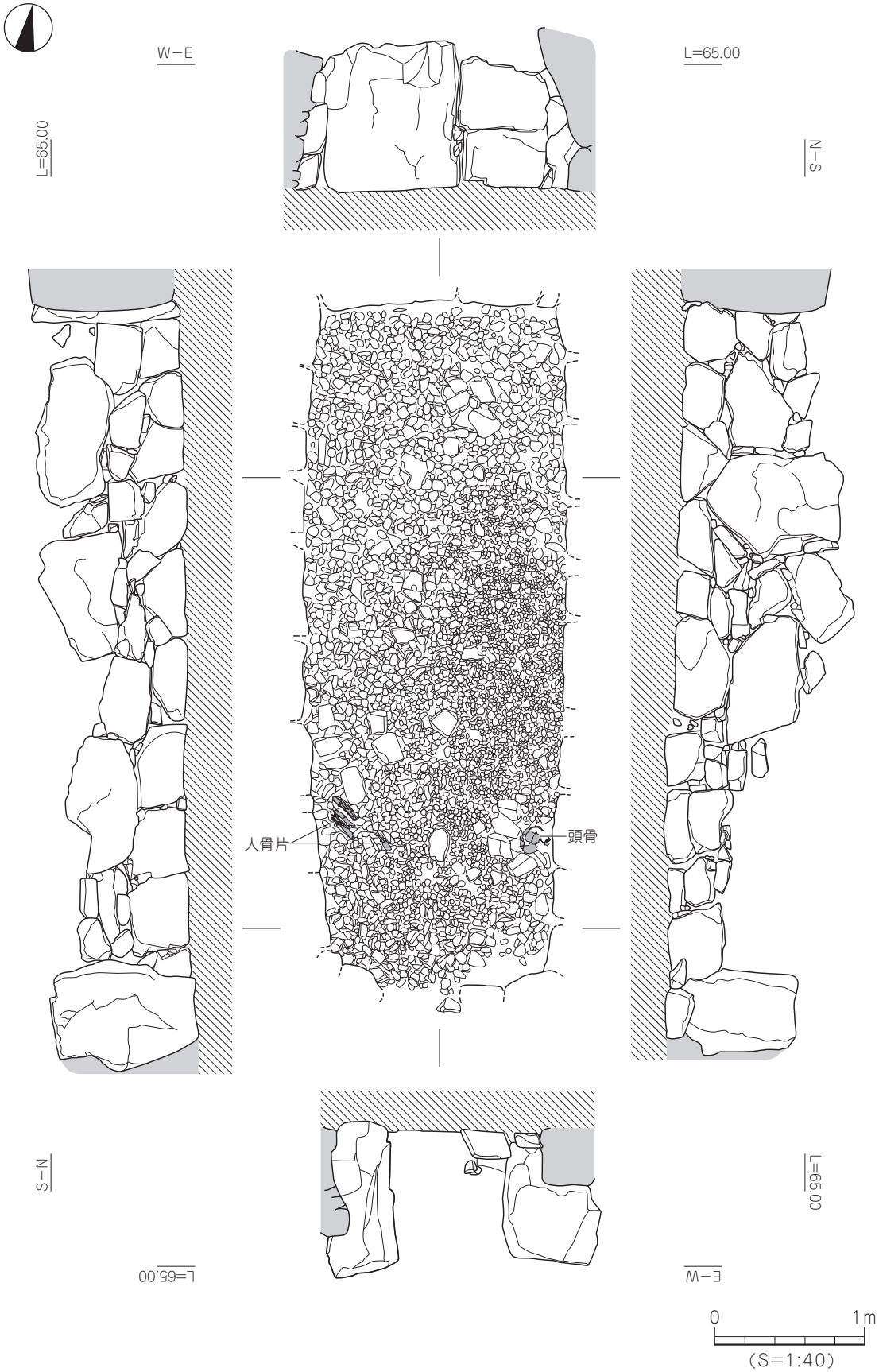
（２）石室

墳丘盛上の断面において墳頂部付近の盛土が断ち切れるラインを確認し、墳丘面においても陥没痕跡を確認した。石室は、玄室と羨道部ともに大きく崩壊しており、玄室内部は埋土と壁体の石材で埋めつくされている状態であった。崩壊の原因は明らかではないが、崩落した石材の中に天井石と考えられる大型石材が見られないことから、後世における石材の搬出が行われているようである。

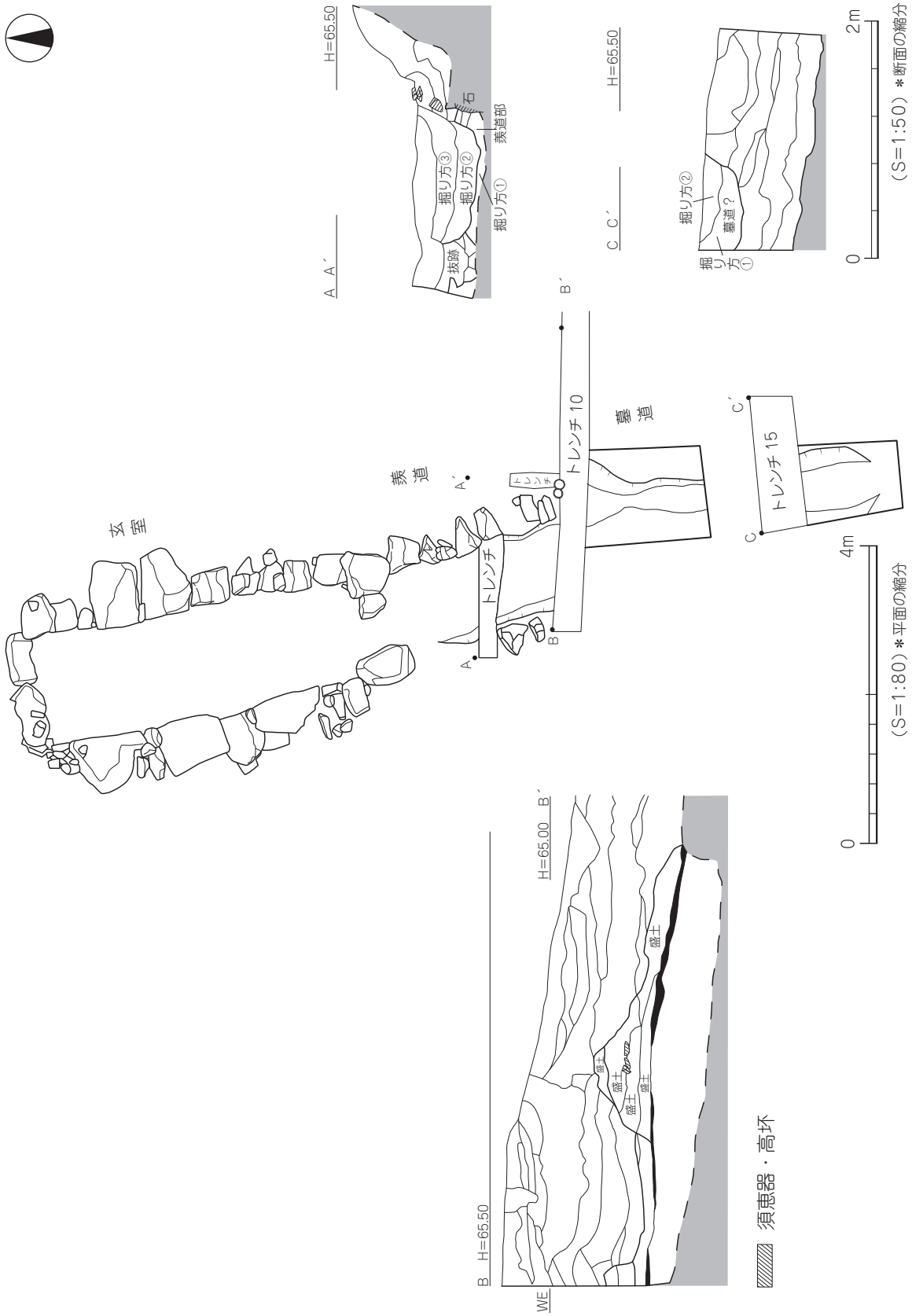
石室は、玄室と羨道部で構成される。玄門部には高さ 1m 程度の立石を用いた両袖式の横穴式石室



第８図　石室測量図



第９図　玄室測量図



第10図　羨道部・墓道部土層測量図

で南に開口する。石室規模は全長 6.74m、玄室長 4.60m、幅 1.45 ～ 1.70m を測る。最大幅は玄室中央部にあり、やや胴張りの長方形の平面プランを持つ。側壁は基底石から 1 ～ 3 段（0.4 ～ 1.2m）が遺存し、奥壁は高さ 1m の一枚岩（西側）と、高さ 40cm の石材 2 段（東側）が遺存している。石材には割石が使用され、石室内面に平面的な面を揃えて構成されている。側壁は持ち送りが強い。奥壁は側壁に挟まれる構造から奥壁部が先に設置され、その後側壁が設置されたようである。

（3）玄室床面状況

玄室床面には 2 ～ 8cm 大の川原石（玉石）を敷き詰め礫床としている。この礫床は、西側と東側では敷かれる玉石の大きさに違いが見られる。玄室床面全体に径 6 ～ 8cm 大の玉石を敷いた後、東半の玄門部から石室の 3 分の 2 辺りには径 2 ～ 3cm の玉石が敷かれている。玄門部付近の東側では頭蓋骨が、西側では大腿骨等と見られる人骨片が礫床上から検出されているが、出土状態から追葬の段階で前段階に埋葬された人物の遺骸を玄門部付近に部位を分けて集骨したものと考えられる。また、2cm 大の川原石は 8cm 大の川原石よりも上層に位置し、頭蓋骨が検出された東半に敷かれていることから、追葬段階で遺骸と同様に礫床の整理が行われたものと考えられる。玉石除去後、下部構造の確認作業を行ったが排水施設などは確認しなかった。

（4）羨道

羨道部は、開口部から玄門部に向けて狭くなっており石材による壁体を伴う。検出規模は長さ 2.14m、幅 1.10m を測る。東側では 1 ～ 2 段（30 ～ 40cm）の石材が検出されたが、西側では基底石の二つを残すのみであった。玄室の床面と羨道部の比高差は 20cm を測ることから、玄室床面と羨道部とで段差をもつ形態と考えられる。また、土層横断面にて開口部付近で、墳丘盛土上面から地山層上の基盤造成面まで掘削されている U 字状の掘り方を検出した。この掘り方は、断面の観察から少なくとも 3 回の掘り方を確認している。

（5）墓道

羨道部の東側にとりつく南北方向の溝状の遺構である。検出規模は長さ 4.10m、幅 1.00 ～ 1.24m、深さ 0.34m を測る。土層観察より 2 回の掘削が行われているようである。遺物は出土していない。

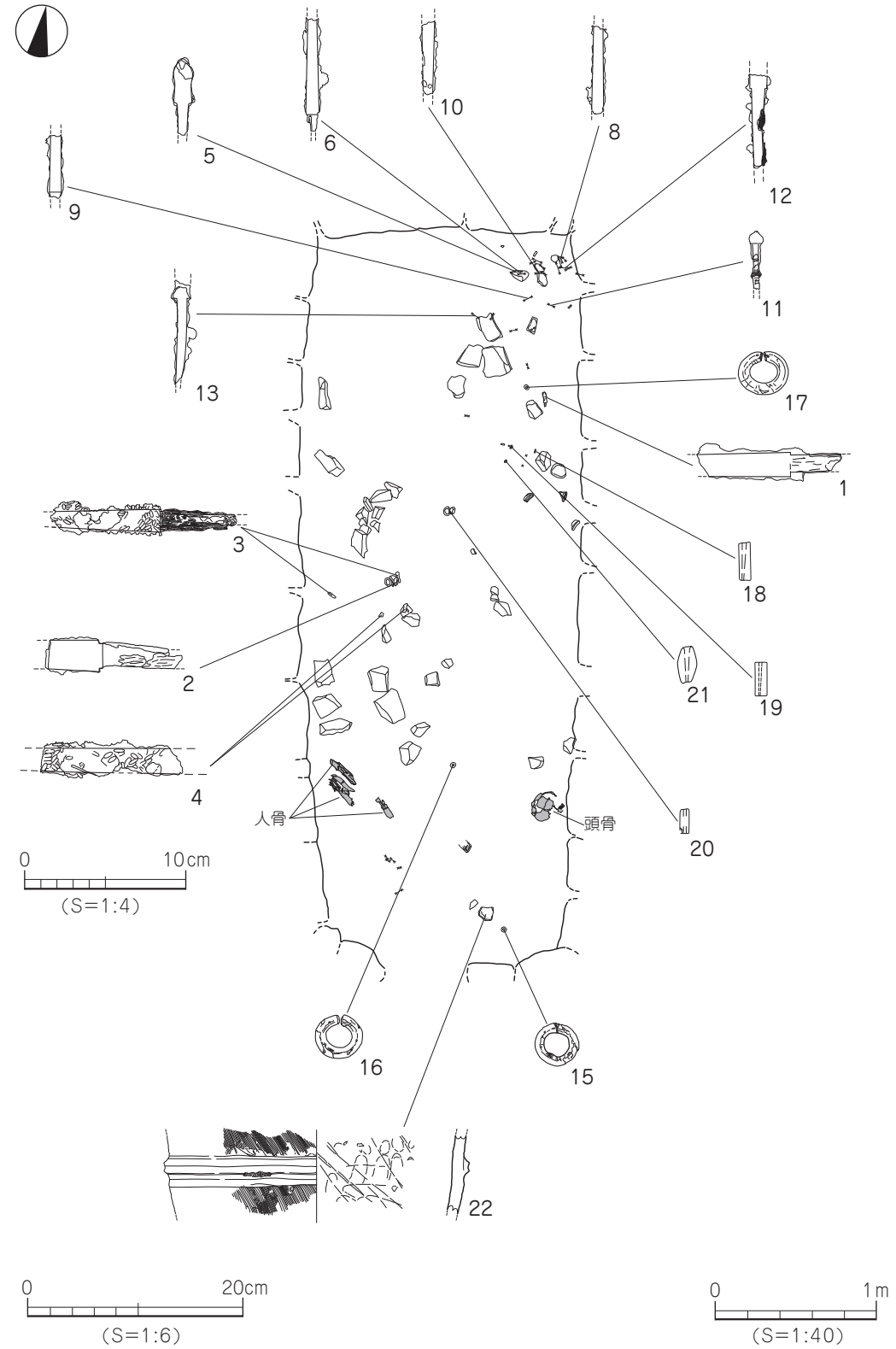
（6）周溝

周溝は、南西部から時計回りに北東方向にかけて検出している。石室中央部から西側では 4m、北東部では 7m の距離を測る。検出規模は幅 1.00m ～ 1.40m、深さ 0.20 ～ 0.44m を測る。遺物は出土していない。

第 2 節　出土遺物

（1）遺物出土状況

遺物は玄室内、羨道部、墳丘部と古墳周辺（主に表採）から出土している。玄室内からの出土遺物は主に奥壁東側と玄門部付近に集中して検出されている。奥壁東側では耳環 1 点、鉄製刀子 1 点、碧



（鉄製品・装身具は１：4、埴輪は１：6）

第 11 図　玄室内出土遺物位置図

玉製管玉３点、水晶製切子玉１点、鉄鏃等の鉄片が出土し、玄門部付近では耳環２点、鉄片数点が出土している。土器は、須恵器の破片３点と土師器の小片のほか、埴輪片が１点出土している。羨道部では開口部東側の側壁外側で、蓋を開けて並べられている有蓋高坏が出土している。墳丘部で出土した遺物は少なく、須恵器甕の破片１点である。古墳周辺の表採遺物は、南側から西側にかけて多く見られ須恵器片や埴輪片が出土している。特に埴輪は、古墳南西部の墳丘外と北側の墳丘外での出土となっている。

（２）玄室内出土遺物

鉄製品（第11・12図）

刀子（1 ～ 4）

1は玄室北東部での検出である。刃部から茎にかけて遺存する。現存長9.0cmを測る。2 ～ 4は石室中央部の西側で出土した。2は刃部から茎にかけて遺存する。現存長8.4cmを測る。3は刃部から茎にかけて遺存し、現存長11.5cmを測る。柄部に木質が残る。刃部にハエの囲蛹殻が多数付着している。4は刃部の破片。ハエの囲蛹殻が付着する。

鉄鏃（5 ～ 14）

5は平根の圭頭鏃。6 ～ 10は柄部の破片。11は箙被関部に木質が残る。12は茎に木質が残る。13は鏃身の関部が残る。14は鏃身から頸部の破片。刃部に布目痕、柄部に木質が残る。

装飾品（第11・13図）

耳環（15 ～ 17）

15は玄門近くで出土した。中実の銅芯金張製で長さ2.6cm、幅2.7cm、重さ9.17gを測る。16は石室中央部からやや玄門よりで出土した大型の耳環。中実の銅芯金張製で長さ2.75cm、幅2.9cm、重さ17.76gを測る。17は奥壁側の右側で出土した大型の耳環。中実の銅芯金張製で長さ2.65cm、幅3.1cm、重さ19.47gを測る。

玉類（18 ～ 21）

18・19は碧玉製の管玉。20はガラス製。ガラス小玉を砕いて作った再生品である。21は水晶製の切子玉。高さ2.3cm、重さ3.29gを測る。

埴輪（第11・13図）

円筒埴輪（22）

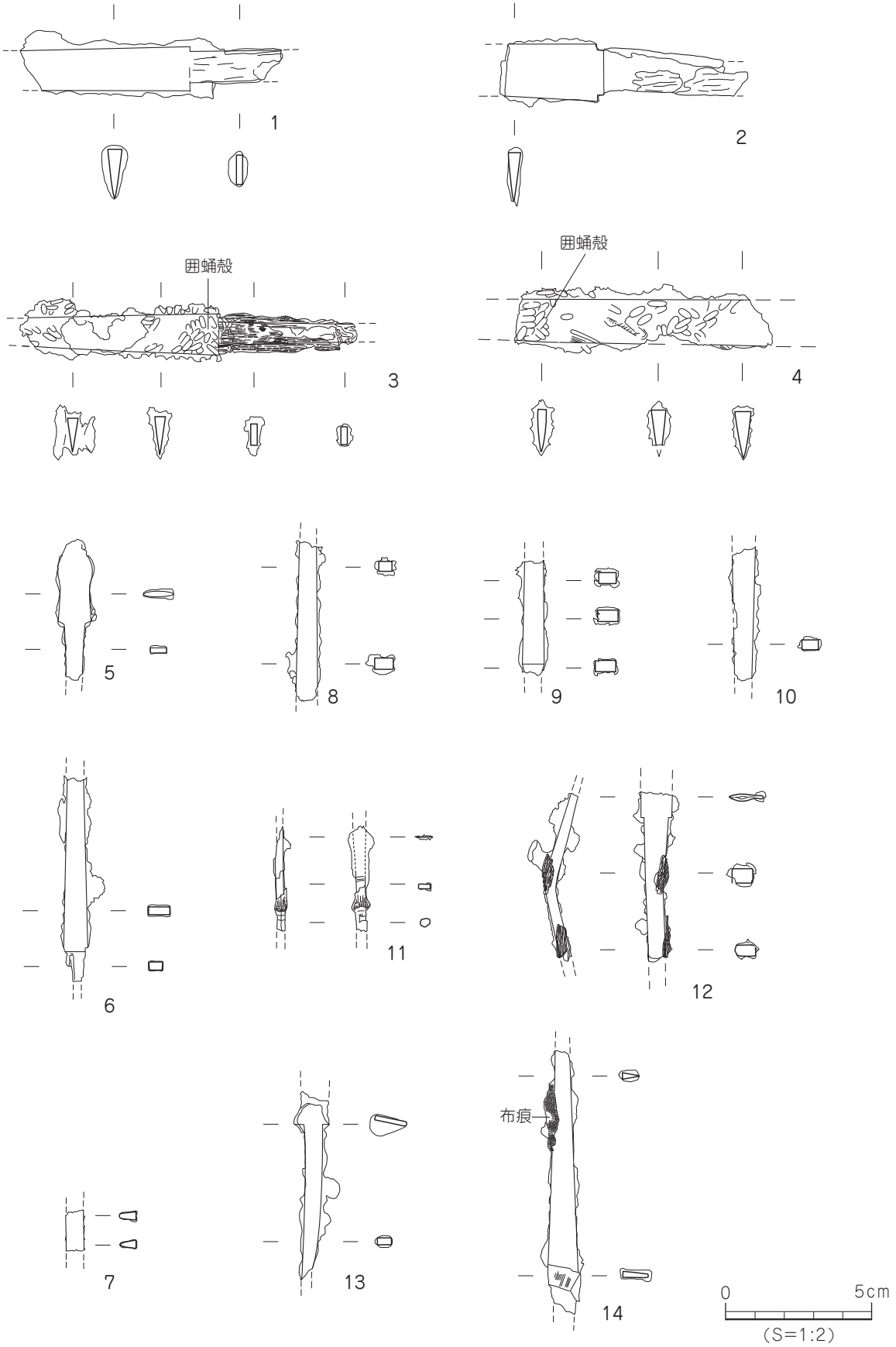
玄門付近で出土した突帯を含む体部片である。

（３）羨道部出土遺物

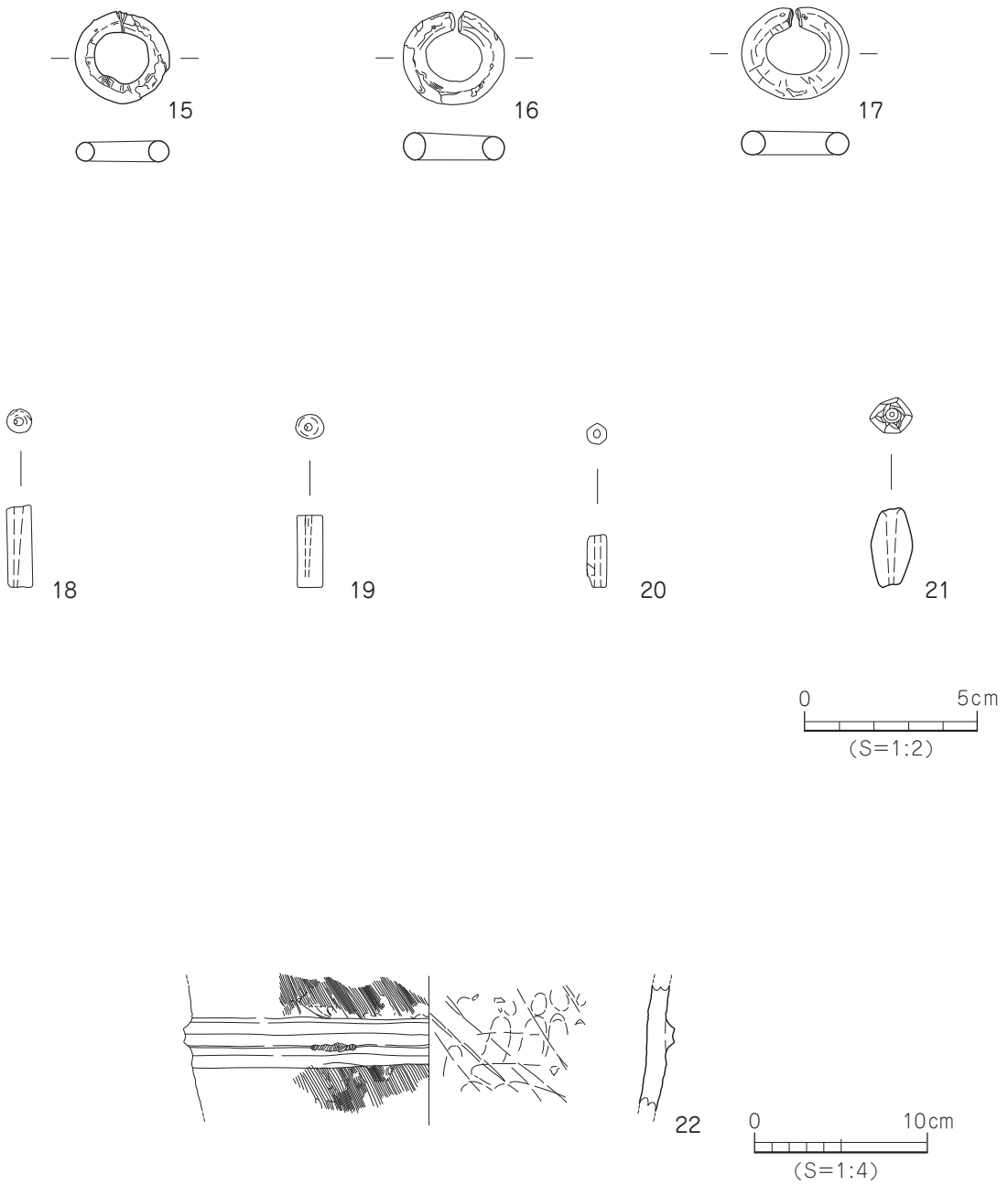
須恵器（第14・15図）

高坏（23・24）

23、24は羨道の開口部東側で蓋を開けて並べられていた有蓋高坏である。23はツマミの付く蓋。ツマミ中央部は凹む。天井部はやや扁平で口縁端部は丸い。24は高坏。口縁部は内傾して上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。脚柱は太く短い。脚裾は水平に短く伸びる。端部は丸く仕上げられている。



第 12 図　玄室内出土遺物実測図（1）



第 13 図　玄室内出土遺物実測図（2）

（４）その他の出土遺物

土師器（第14・15図）

甕（25）

25は古墳南西部の表採品で詳しい出土位置は不明。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は丸く仕上げられる。器壁は厚い。

高坏（26）

26は南側墳丘外の表採品。外上方に開く口縁部。端部は丸く仕上げる。

須恵器（第14・15図）

蓋坏（27 ～ 32）

27は宝珠ツマミ。古墳南西部の表採品で詳しい出土位置は不明。28 ～ 34は南側墳丘外での表採品。28の口縁端部は丸い。29 ～ 32は坏身。29のたちあがりは内傾する。口縁端部は内に段をもつ。受部は水平にのびる。30のたちあがりは内傾して短くのびる。口縁端部は尖り気味。受部はやや上方にのびる。31のたちあがりは内傾したのち上方にのびる。口縁端部は尖り気味。受部は上方にのびる。32のたちあがりは短く内傾する。口縁端部は尖り気味。受部は水平にのびる。

瓻（33・34）

33は口縁部片。口縁端部は肥厚し内に面をもつ。34は古墳西側での表採品。肩部に凹線で区画された文様体に刺突文を施す。

提瓶（35）

体部の破片。古墳南側での出土である。

甕（36）

墳丘頂部での表採品。外反して開く口縁部。端部は外に肥厚する。

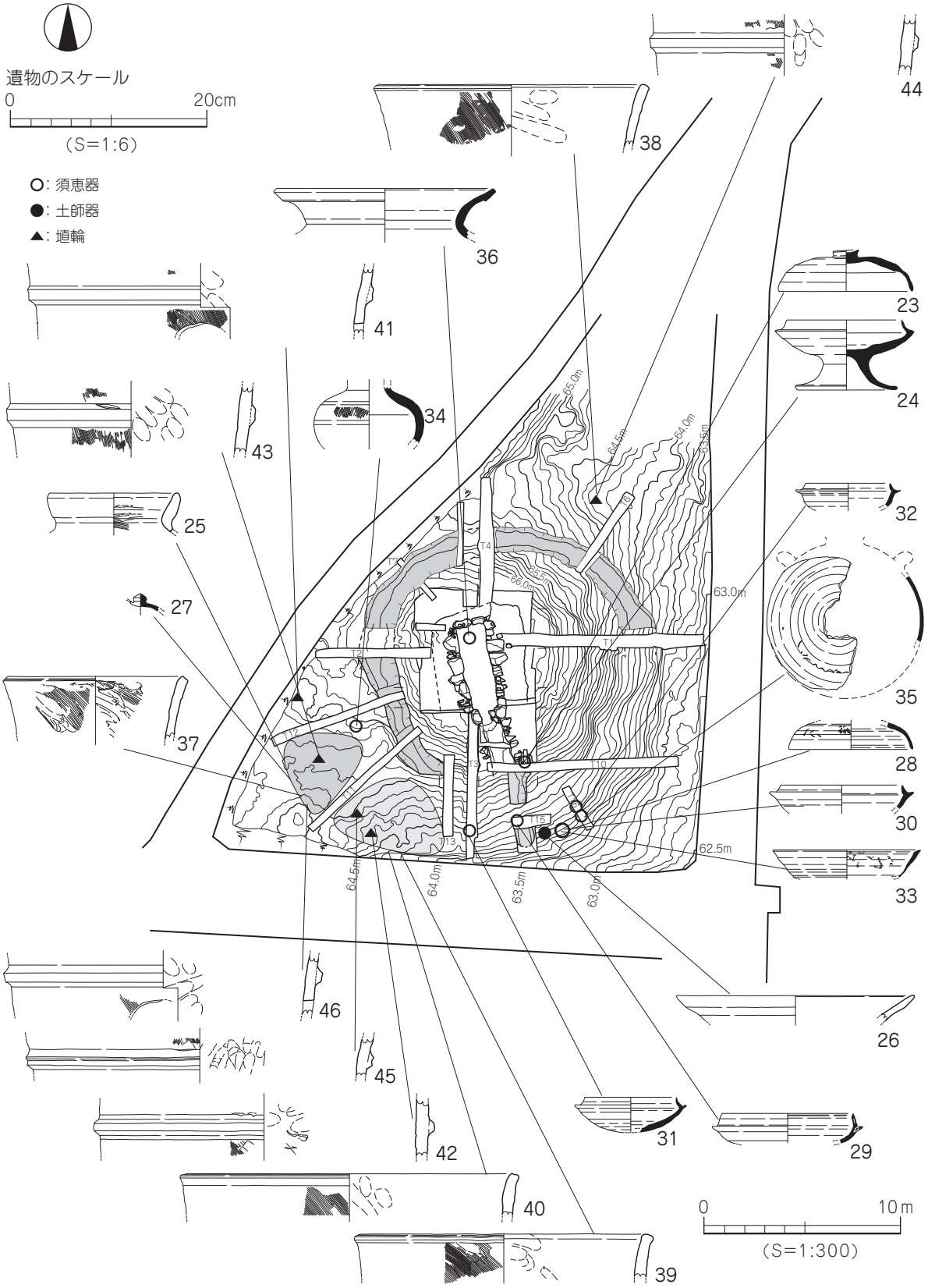
埴輪（第14・16図）

墳丘上での出土はない。図示したものはすべて墳丘外での表採品である。

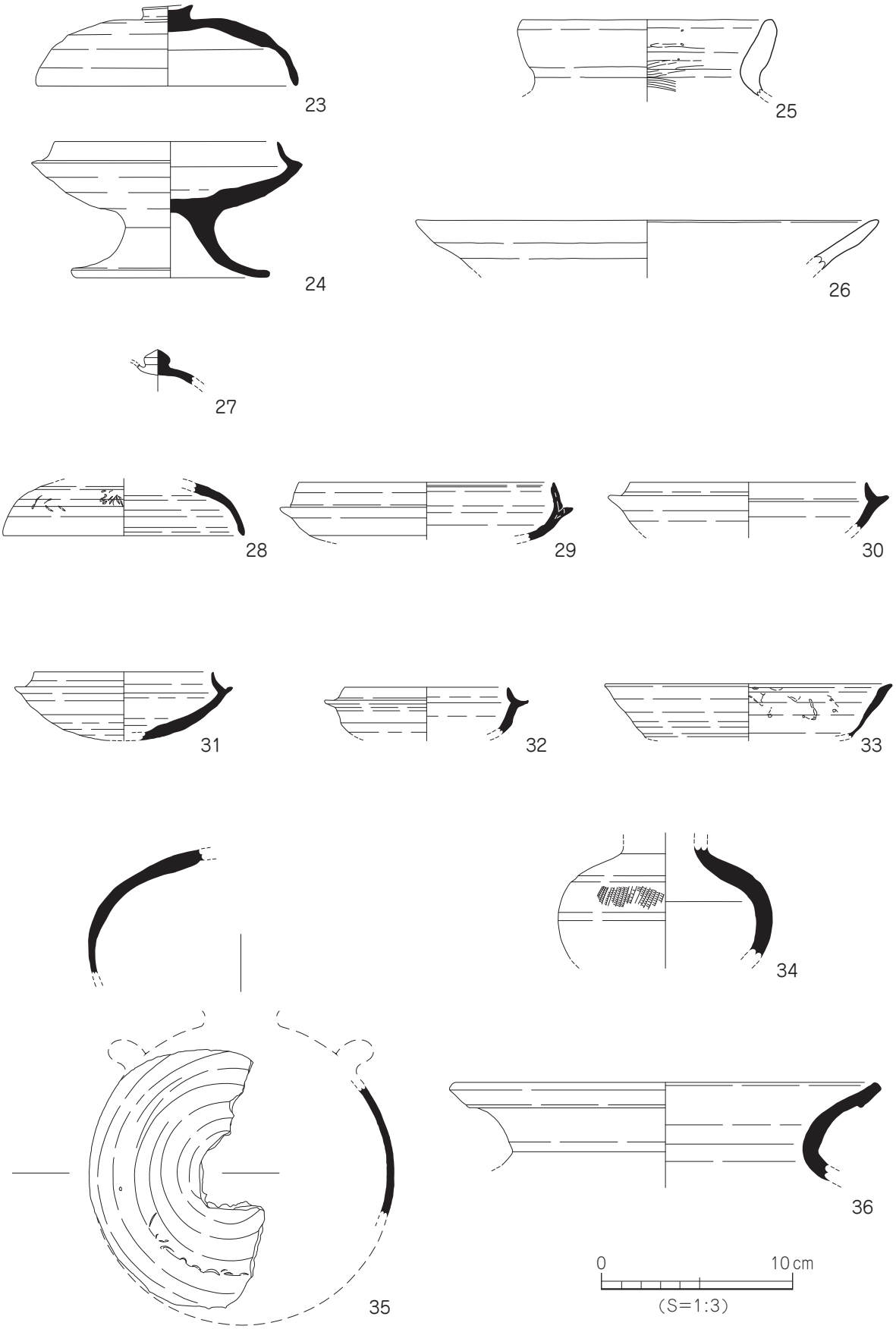
円筒埴輪（37 ～ 46）

37 ～ 41は口縁部片である。37は復元口径17.8cmで小さい埴輪である。焼成は良好で須恵質である。口縁端面はナデにより窪む。38 ～ 41は復元口径25.4cm ～ 33.0cmでやや外反気味に開く口縁部である。38、39の焼成は良好で須恵質である。口縁端部外面と端面はナデにより少し窪む。40は灰色を呈する須恵質の埴輪。口縁端部外面と端面はナデにより窪む。

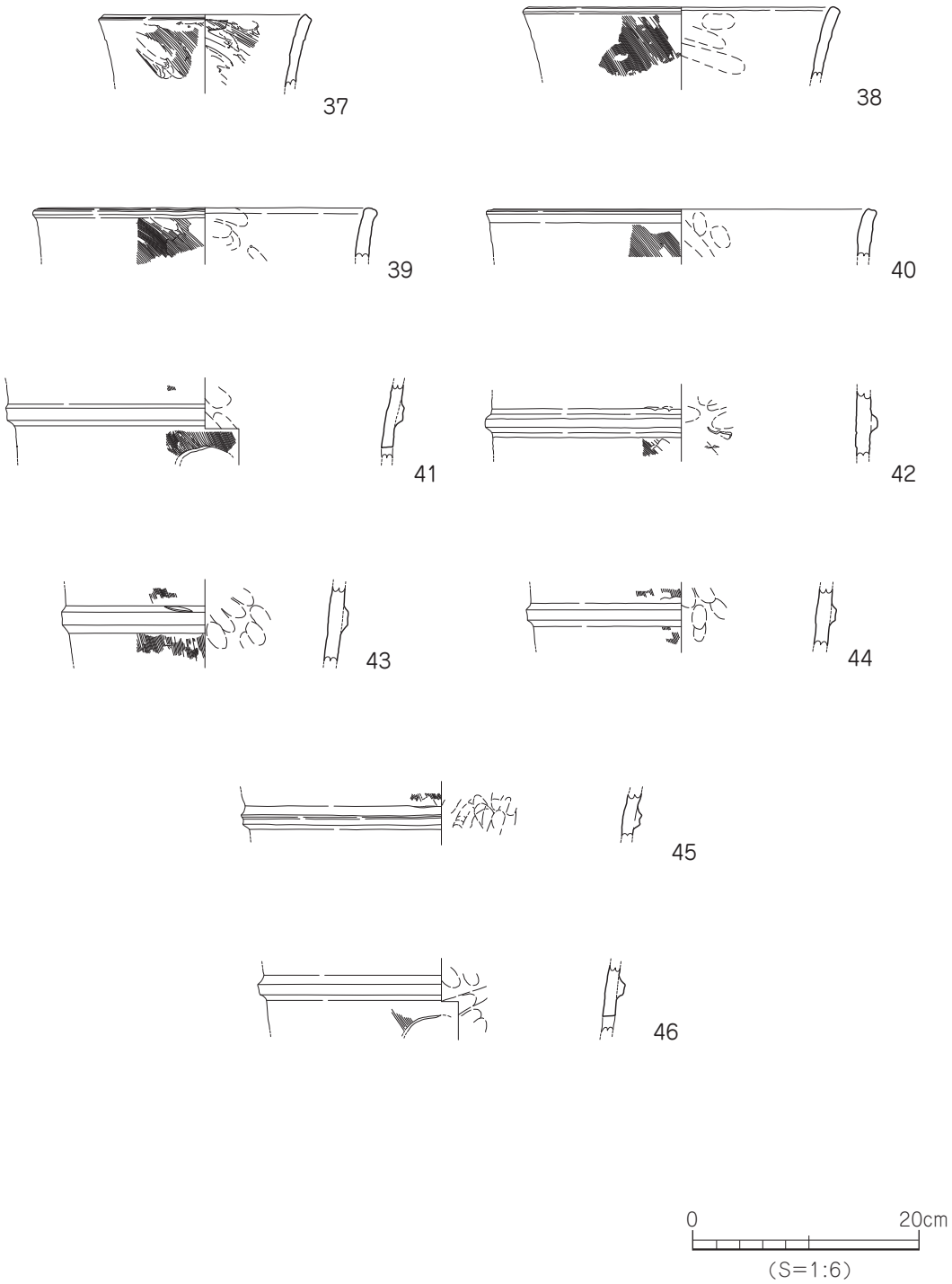
41 ～ 46は突帯を含む体部片。41は焼成良好な須恵質である。体部にはスカシ孔が穿たれている。突帯上面はナデにより窪み、断面はM字状を呈する。42は土師質の埴輪。突帯断面は台形を呈する。43はやや須恵質である。突帯上面はナデにより少し窪み、断面はM字状を呈する。44は灰色を呈する須恵質の埴輪。突帯上面はナデにより窪み、断面はM字状を呈する。45も灰色を呈する須恵質の埴輪。突帯上面はナデにより窪み、断面はM字状を呈する。46は土師質の埴輪。突帯上面はナデにより窪み、断面はM字状を呈する。



第 14 図　墳丘・表採遺物位置図



第 15 図　墳丘・表採遺物実測図（1）



第 16 図　墳丘・表採遺物実測図（2）

遺物観察表　　－ 凡例 －

（1）　以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）　遺物観察表の各掲載について。

法量欄　　（　）：推定復元値

調整欄　　土製品の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、肩→肩部、

胴→胴部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、脚→脚部、底→底部。

胎土欄　　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、褐→褐色粒、黒→黒色粒、白→白色粒。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄　　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 1　　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
1	刀子	刃部～ 5 柄部 一部欠損	鉄	(9.0)	(2.1)	(1.0)	25.62		11
2	刀子	刃部～柄部 一部欠損	鉄	(8.4)	(2.2)	(0.9)	21.64		11
3	刀子	鏃身部～頸部	鉄	(11.5)	(1.9)	(0.7)	19.14	囲蛹殻付着。柄部に木質が残る。	12
4	刀子	刃部	鉄	(8.8)	(2.2)	(0.57)	21.04	囲蛹殻付着。	12
5	鏃	鏃身部～頸部 一部欠損	鉄	(4.8)	(1.3)	(0.8)	4.17		11
6	鏃	頸部 一部欠損	鉄	(6.9)	(1.4)	(0.8)	7.93		11
7	鏃	茎部の一部	鉄	(1.4)	(0.64)	(0.36)	0.46		
8	鏃	茎部端部欠損	鉄	(5.5)	(1.2)	(0.65)	6.58		11
9	鏃	茎部片	鉄	(3.9)	(1.0)	(0.76)	5.45		11
10	鏃	茎部端欠損	鉄	(4.6)	(0.9)	(0.85)	3.86		11
11	鏃	鏃身～箆被部～ 茎部	鉄	(3.6)	(0.9)	(0.39)	1.07		11
12	鏃	茎部欠損 木質残る	鉄	(5.8)	(1.35)	(0.2)	5.74		11
13	鏃	鏃身～頸部 一部残存	鉄	(6.4)	(1.2)	(1.0)	5.79		11
14	鏃	鏃身部～頸部 一部欠損	鉄	(8.9)	(1.4)	(1.1)	9.98	刃部に布目痕。柄部に木質が残る。	12

表２　　出土遺物観察表　装身具（耳環）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
15	耳環	完形	銅芯金張り製 銅製	2.6	2.7	0.6	9.17		11
16	耳環	完形	銅芯金張り製 銅製	2.75	2.9	0.7	17.76		11
17	耳環	完形	銅芯金張り製 銅製	2.65	3.1	0.67	19.47		11

表３　　出土遺物観察表　装身具（玉類）

番号	器　種	残　存	材　質	色	法量				備考	図版
					直径(cm)	孔径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
18	管玉	完形	碧玉	濃緑色	0.71	0.25	2.4	2.39		11
19	管玉	完形	碧玉	濃緑色	0.8	0.1 ～ 0.25	2.1	2.55		11
20	管玉	ほぼ完形	ガラス	緑青色	0.58	0.2 ～ 0.3	1.5	0.76	小玉の再生品	11
21	切子玉	ほぼ完形	水晶	透明	1.2	0.1 ～ 0.3	2.3	3.29		11

表４　　出土遺物観察表　土製品（1）

番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
					外面	内面				
22	埴輪	残高	7.1	円筒埴輪の突帯部。断面M字状の低い突帯をもつ。	ナデ ハケ(7～11本/cm)	オサエ(指頭痕)	黄橙色 橙色	石・長(0.5～1) ◎		13
23	蓋	つまみ径 口径 器高	2.7 13.5 4.2	天井部はやや扁平。ツマミは中央部が窪む。口縁端部は丸く仕上げる。	天回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 長(1～3) ◎		13
24	有蓋高坏	口径 底径 器高	11.6 10.0 7.1	たちあがりは内傾して上方に短くのびる。脚中は太く短い。脚裾は水平に短く開く。	回転ナデ 坏底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 長(1～2) ◎		13
25	甕	口径 残高	(13.1) 3.7	肥厚する口縁部。口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ ハケ(6本/cm)	橙色 橙色	密 長(1～3) 黒褐色粒 ◎		13
26	高坏	口径 残高	(24.2) 2.6	口縁部片。端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	ナデ	橙色 橙色	密 石・長(1～2) ◎		13
27	蓋	つまみ径 残高	1.4 1.9	宝珠ツマミ。	回転ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 石・長(1～2) ◎		13
28	坏蓋	口径 残高	(12.6) 2.8	口縁端部は丸く仕上げる。	天回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 黒色粒(0.5～2.5) ◎		13
29	坏身	口径 残高	(13.3) 3.1	たちあがりはやや内傾する。端面は内に段をもつ。受部は水平にのびる。	回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰褐色・にぶい赤褐 にぶい赤褐	密 長(1～4) ◎	自然釉	13
30	坏身	口径 残高	(12.4) 2.5	たちあがりは内傾して短くのびる。端部は尖り気味。受部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 長(1～3) 黒褐色粒(1～2) ◎		13
31	坏身	口径 残高	(9.4) 3.6	たちあがりは内傾して上方に短くのびる。受部は上方にのびる。底部は丸い。	回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	黄灰色 灰白色	密 長(1) 黒褐色粒(0.5～3) ◎	自然釉	13
32	坏身	口径 残高	(8.6) 2.5	たちあがりは内傾して短くのびる。受部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	密 長(0.5～2) 黒色粒 ◎		13
33	甕	口径 残高	(15.0) 2.9	口縁端部は肥厚し上方に面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰オリーブ色	密 長(1～3) 黒色粒 ◎	自然釉	14

表５　　出土遺物観察表　土製品（2）

番号	器種	法量（㎝）		形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
					外面	内面				
34	瓶	残高	6.0	肩部に凹線で区画された文様帯に斜位の刺突文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 長(1～4) ◎		14
35	提瓶	残高 残厚	13.6 6.5	扁平な体部片。	回転ヘラケズリ	ナデ	灰白～灰黄 灰黄・浅黄	長(1～4) 黒 ◎	自然釉	14
36	甕	口径 残高	(22.0) 5.2	大きく外反する口縁部。口縁端部は外に肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 石･長(0.5～3.5) ◎		14
37	埴輪	口径 残高	(17.8) 6.3	円筒埴輪の口縁部。口縁部は外反する。口縁端面は窪む。	ナデ（指頭痕） ハケ(7～8本/㎝)	ハケ　マメツ	橙色・灰褐色 灰白色・灰黄色	密 石･長(0.5～2) 黒 ◎	須恵質	14
38	埴輪	口径 残高	(25.4) 6.3	円筒埴輪の口縁部。口縁部は外反する。	ヨコナデ ハケ(8～14本/㎝)	ナデ（指頭痕）	橙色 橙色	石･長(1～2) ◎	須恵質	14
39	埴輪	口径 残高	(29.0) 4.3	円筒埴輪の口縁部。口縁部は外反する。	ハケ(7～10本/㎝)	ナデ（指頭痕）	灰褐色 灰オリーブ色	密 長(1～2) ◎	須恵質	14
40	埴輪	口径 残高	(33.0) 4.2	円筒埴輪の口縁部。口縁部は外反する。口縁端面は窪む。	ヨコナデ ハケ(8～11本/㎝)	ヨコナデ ナデ(指頭痕)	灰白色 灰白色	密 長(1～2) ◎	須恵質	14
41	埴輪	残高	6.4	突帯を含む円筒埴輪の体部片。突帯は断面M字状を呈する。	ハケ(7～15本/cm) 突帯ナデ	ナデ（指頭痕）	橙色 にぶい橙色	密 石･長(1～2) ◎	須恵質	14
42	埴輪	残高	6.1	突帯を含む円筒埴輪の体部片。突帯は断面台形状を呈する。	突帯マメツ ハケ(9～10本/cm)		橙色 橙色	密 石･長(0.5～2) ◎		14
43	埴輪	残高	6.6	突帯を含む円筒埴輪の体部片。突帯は断面M字状を呈する。	ハケ(9～14本/cm) 突帯ナデ	ナデ（指頭痕）	黄橙色 明黄褐色	石･長(1～2)	須恵質	14
44	埴輪	残高	4.9	突帯を含む円筒埴輪の体部片。突帯は断面M字状を呈する。	ハケ(9～11本/cm) 突帯ナデ	ナデ（指頭痕）	灰色 灰白色	長(1～2)	須恵質	14
45	埴輪	残高	4.5	突帯を含む円筒埴輪の体部片。突帯は断面M字状を呈する。	ハケ(6～12本/cm) 突帯回転ナデ	ナデ（指頭痕）	灰褐 にぶい黄橙色	密 石･長(0.5～2) 黒･褐 ◎	須恵質	14
46	埴輪	残高	5.9	突帯を含む円筒埴輪の体部片。突帯は断面台形状を呈する。円形透かし孔あり。	ハケ(8本/cm) 突帯ナデ	ナデ（指頭痕）	橙色 橙色	石･長(1～2) ◎		14

第Ⅳ章　分析

愛媛県松山市五郎兵衛谷７号墳出土の古墳人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：愛媛県、古墳時代、保存不良、男性

はじめに

愛媛県松山市鷹子町乙 402-5 に所在する五郎兵衛谷７号墳の発掘調査が、農地造成に伴い 1998（平成 10）年と 1999（平成 11）年におこなわれた。この発掘調査によって石室から人骨が出土し、松山市埋蔵文化財センターに保管されていた。年報 12（松山市教委ほか、2001）によると本遺跡は周溝を伴う直径約 13m の円墳で、内部主体は両袖式の横穴式石室である。本古墳の周辺には 11 基の古墳が確認されており、これまで１～６号墳の調査が実施され、６世紀末～７世紀初頭における群集墳の様相が明らかになっている。これらの古墳は 10m 内外の円墳で、１号墳には三累環頭太刀が副葬されていた。

愛媛県から出土した古墳人骨のうち筆者らが調査や研究に携わったものは、今治市相の谷古墳群（松下･他、1995）、二の谷２号墳（松下、2000）、馬島長山１号墳、鳥越１号墳、古谷犬山谷古墳（松下･他、2013）のほかに松山市の宮前川北斎院遺跡（松下、1998a）、客谷古墳群（松下、2006a）、三味線山古墳（松下・他、2014）、瀬戸風峠遺跡、東山鳶森古墳、久万ノ台１号墳、古照遺跡、鶴が峠遺跡（松下、2018）、久米タンチ山１号墳、天山２号墳、三島神社古墳、伊予市の猪の窪古墳（松下、2006b）から出土した人骨があるが、報告例は少なく、愛媛県の古墳人の全体像を把握するまでには至っていないのが現状である。

７号墳から検出された人骨の保存状態は悪いが、残存人骨を解剖学的に精査し、人類学的観察などをおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資　料

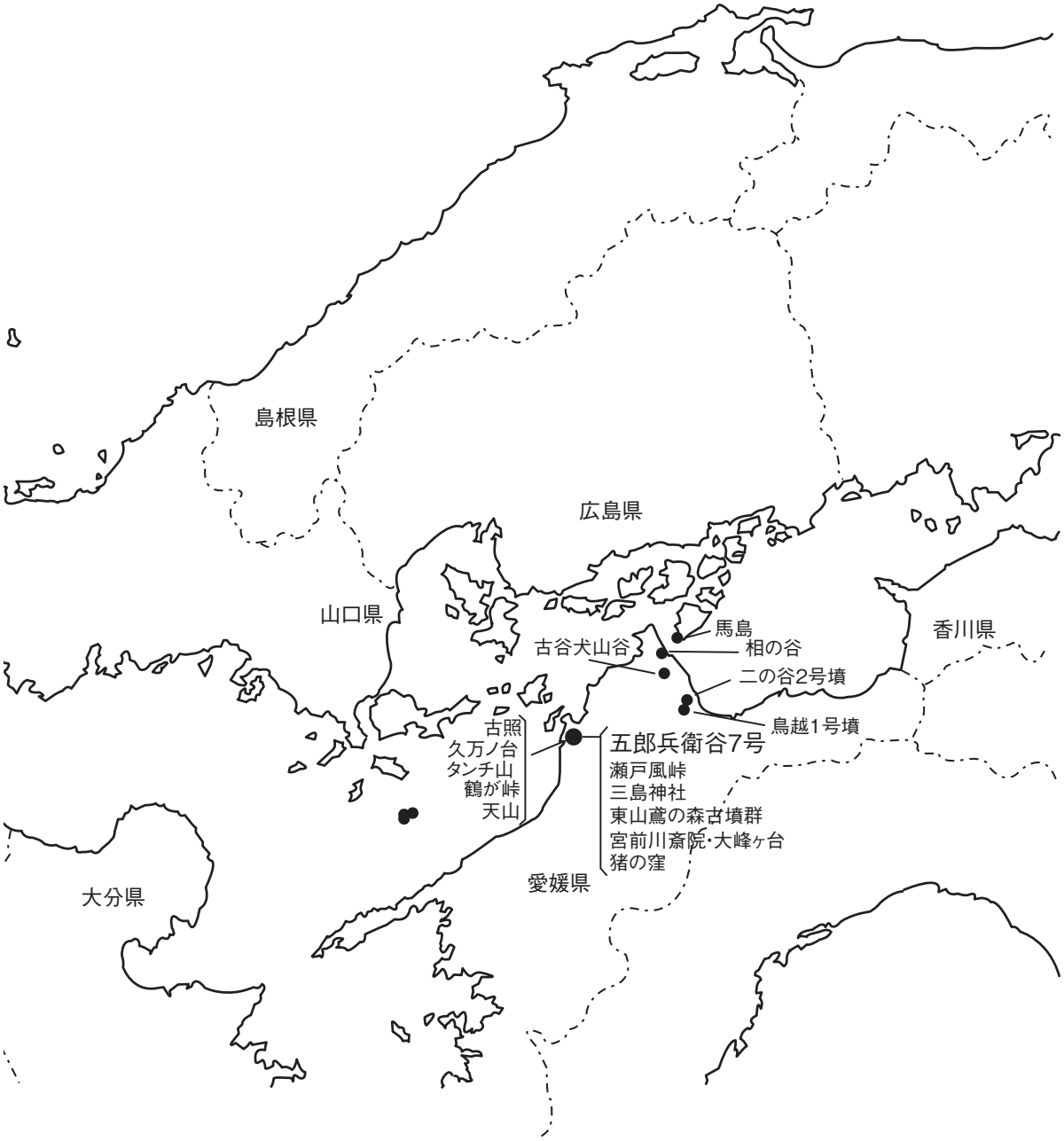
報告書によると、７号墳の石室の規模は玄室全長 4.6m、最大幅 1.7m で、後世における天井石の搬出に伴い石室は大きく崩壊していた。玄門部付近の東側に頭蓋、西側には大腿骨等とみられる人骨片が検出されている。調査担当者は、出土状況からこの人骨は追葬の段階で、以前に埋葬された人物の遺骨を玄門部付近に部位を分けて集骨したものと想定している。なお、本古墳では石室開口部付近の土層断面の観察から、少なくとも３回の追葬がおこなわれたことが推測されており、追葬時期のひと

つは追葬時に加えられた有蓋高坏の考古学所見から、６世紀後半と考えられている。

石室内からの出土遺物は、奥壁東側から耳環１点、鉄製刀子の完形品１点、管玉３点、水晶製切子玉１点、鉄鏃等の鉄製品が多数が、玄門部付近からは耳環２点、鉄製品片多数が検出されている。

なお、この古墳は考古学的所見から古墳時代（6 世紀）に属すると推定されていることから、本人骨は古墳時代人骨である。

本古墳から出土した人骨を解剖学的に精査したところ、残存部位と残存状態から１体分と想定される（表 a)。本人骨は、壮年の男性骨である（表 b)。なお、表 c に年齢区分を示した。



愛媛の古墳

表 a　資料数（Table 1. Number of materials）

成　人			幼小児	合　計
男性	女性	不明	0	1
1	0	0		

表 b　出土人骨一覧（Table 2. List of skeletons）

人骨番号	性別	年齢
五郎兵衛谷 7 号墳人骨	男性	壮年

表 c　年齢区分（Table 3. Division of age）

	年齢区分	年　齢
未成人	乳児	1 歳未満
	幼児	1 歳～ 5 歳　（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6 歳～ 15 歳　（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16 歳～ 20 歳　（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21 歳～ 39 歳　（40 歳未満）
	熟年	40 歳～ 59 歳　（60 歳未満）
	老年	60 歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

所　見

五郎兵衛谷７号墳人骨（男性・壮年）

遺存状態は悪く、残存していたのは頭蓋と大腿骨、脛骨のみであった。

１．頭蓋

（1）脳頭蓋

前頭骨の一部と、頭頂骨から後頭骨にかけて残存していたが、保存状態は悪い。前頭結節の発達は悪く、外後頭隆起はやや発達している。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は認められない。三主縫合は観察できた。三主縫合は内外両板とも明瞭で開離している。脳頭蓋の計測はできなかった。

（2）顔面頭蓋

左側上顎骨と左側頬骨が残存していたが、保存状態は悪い。眉上弓の隆起は強い。保存状態が悪く計測はできなかった。

２．歯

上顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／７６５／／／／｜／／／／５６７８［○：歯槽開存、●：歯槽閉鎖、／：不明（破損）］

（1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯）

咬耗度はBrocaの２度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）～３度（咬耗が象牙質まで及ぶ）である。歯の咬合形式は不明である。

３.四肢骨

①大腿骨

左側の骨体が残存していた。計測はできないが、観察したところ、骨体はやや太く、粗線や骨体両側面の後方への発達は悪い。

②脛骨

両側の骨体が残存していた。骨体は太く、前縁はシャープである。ヒラメ筋線は観察できない。骨体の断面形は左側はヘリチカのＶ型（後面が卵円形）を呈している。計測はできない。

４．性別・年齢

外後頭隆起がやや発達し、眉上弓の隆起も強く、四肢骨が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は三主縫合の内外両板が開離していることから壮年と思われる。

要　約

愛媛県松山市鷹子町乙402-5に所在する五郎兵衛谷７号墳の発掘調査が、農地造成に伴い1998（平成10）年と1999（平成11）年におこなわれ､石室内から人骨が検出された。保存状態は著しく悪かったが、人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

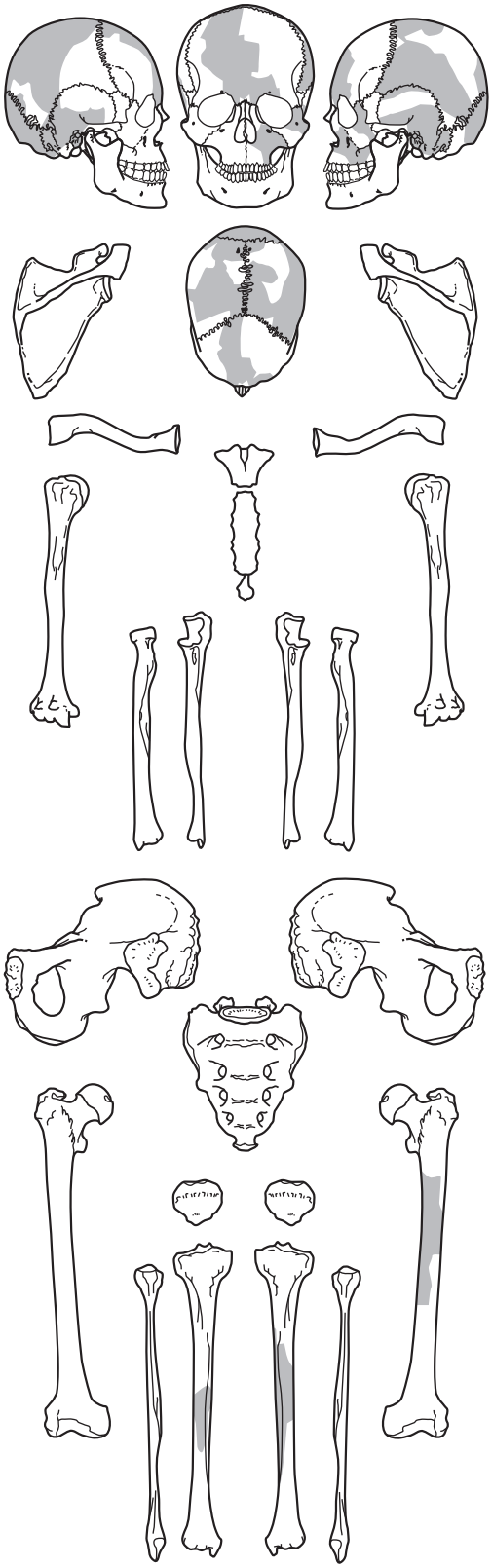
1. 取り上げられていたのは１体分の頭蓋と大腿骨、脛骨のみである。
2. この人骨は、考古学的所見から、古墳時代（6世紀）に属する人骨と推測されている。

3. 本人骨は、壮年の男性骨である。
4. 大腿骨は大きいが、粗線や骨体両側面の後方への発達が悪い。脛骨も大きく、前縁は鋭い。
5. 7号墳から検出された壮年の男性は、下肢骨がやや大きいことから、体格は悪くはなかったようであるが、粗線や骨体両側面の後方への発達が悪いことから、日常的に下肢筋を酷使する生活様式は想定できない。

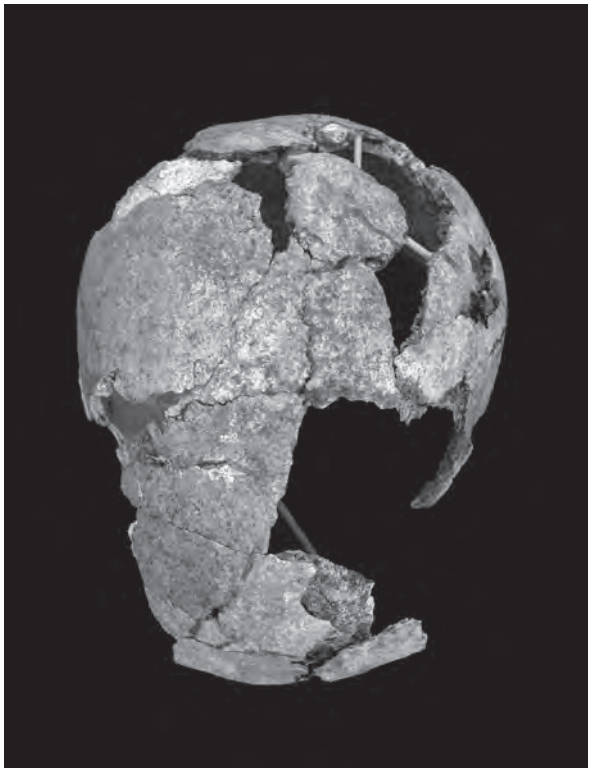
≪参考文献≫

1. 松下真実・他、2013：愛媛県今治市古谷犬山谷古墳出土の古墳人骨。古谷犬山谷古墳（埋蔵文化財発掘調査報告書第175）：26-31.
2. 松下真実・他、2014：愛媛県松山市三味線山古墳出土人骨。三味線山古墳・船ケ谷向山古墳（松山市文化財調査報告書168）：80-91.
3. 松下真実・他、2017：東山鳶が森古墳群２次調査出土の古墳・近世人骨。松山市埋蔵文化財調査年報29：61-72.
4. 松下真実・他、2018：鶴が峠遺跡出土の古墳人骨。松山市埋蔵文化財調査年報30：59-68.
5. 松下真実・他、愛媛県松山市瀬戸風峠出土の古墳人骨（投稿中）
6. 松下真実・他、愛媛県松山市東山鳶が森古墳群１次調査出土の古墳・近世人骨（投稿中）
7. 松下真実・他、愛媛県松山市久万ノ台１号墳出土の人骨（投稿中）
8. 松下真実・他、愛媛県松山市天山２号墳出土の人骨（投稿中）
9. 松下真実・他、愛媛県松山市古照遺跡出土の古墳人骨（投稿中）
10. 松下真実・他、愛媛県松山市久米タンチ山１号墳出土の古墳人骨（投稿中）
11. 松下真実・他、愛媛県松山市三島神社古墳出土の人骨（投稿中）
12. 松下孝幸、他、1995：愛媛県今治市相の谷古墳群出土の古墳時代人骨。相の谷古墳群杉谷支群埋蔵文化財発掘調査報告書（埋蔵文化財発掘調査報告書第57集）：41-54.
13. 松下孝幸、1998：愛媛県松山市宮前川北斎院遺跡出土の古墳時代人骨。斎院・古照 - 新松山空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（遺物編）：525-531.
14. 松下孝幸、2000：愛媛県今治市二の谷２号墳出土の古墳時代人骨。旦遺跡・宮之前遺跡・長沢石打遺跡・長沢１号墳・長沢６号墳・二の谷２号墳・鋏又古墳群・郷桜井西塚古墳（一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ）（埋蔵文化財発掘調査報告書第87集）：232-249.
15. 松下孝幸、2006a：松山市客谷古墳群出土の古墳人骨。大峰ヶ台遺跡Ⅲ（松山市文化財調査報告110）：143-150.
16. 松下孝幸、2006b：猪の窪古墳人骨。伊予市の歴史文化、第54号：18-27.
17. 松下孝幸・他、愛媛県今治市鳥越１号墳出土の古墳人骨（投稿中）
18. 松山市教育委員会、2001：五郎兵衛谷７号墳。松山市埋蔵文化財調査報告年報12：28-30

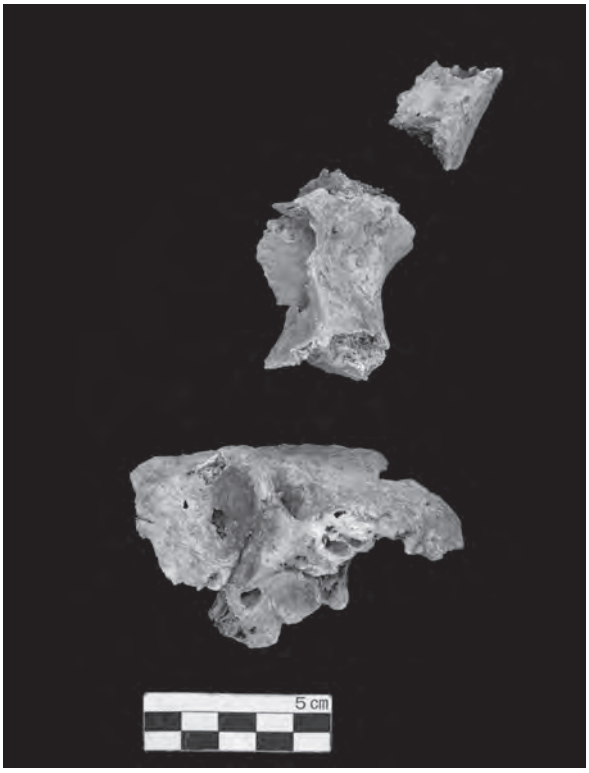
＊Masami　MATSUSHITA、＊＊Takayuki　MATSUSHITA
The Organization of Anthropological Research〔特定非営利活動法人・人類学研究機構〕



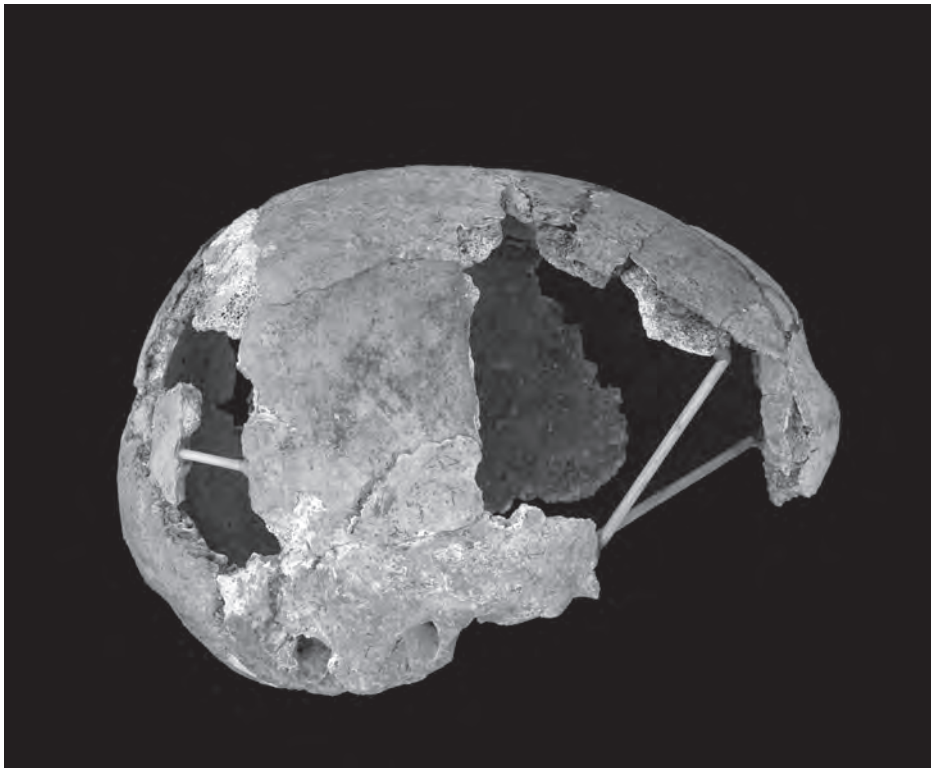
五郎兵衛谷７号墳人骨（男性・壮年）
人 骨 の 残 存 図 （アミかけ部分）
(Fig.2 Regions of preservasion of the skeleton. Shaded sreas are preserved.)



頭蓋上面（Superior view of the skull）

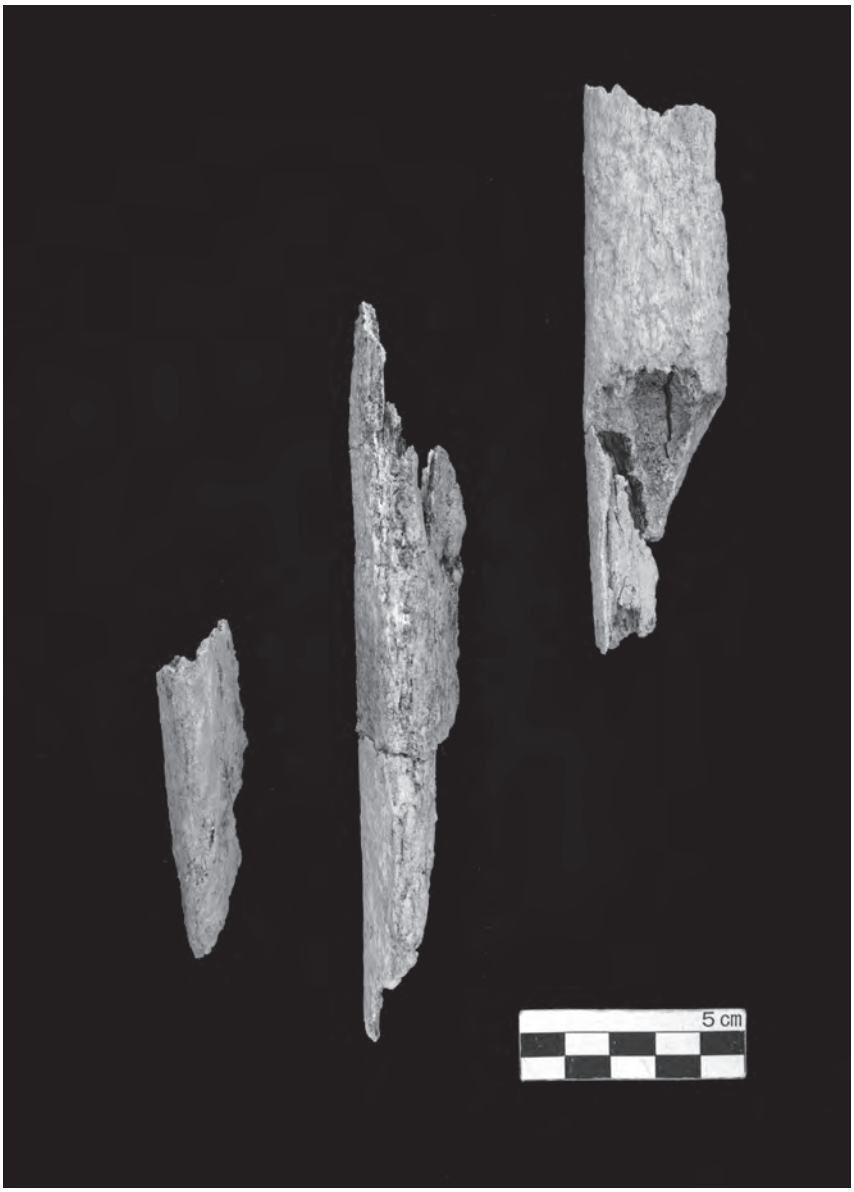


頭蓋（the skull）



頭蓋側面（Lateral view of the skull）

五郎兵衛谷７号墳人骨（男性・壮年）
（ The skeleton from the Gorobedani tumulus No.7,young adult male ）



下肢骨（Bones of the lower limb）

五郎兵衛谷７号墳人骨（男性・壮年）
（ The skeleton from the Gorobedani tumulus No.7,young adult male ）

第Ⅴ章　小結

五郎兵衛谷７号墳は平成10・11年度の調査によって周溝の形状より直径約13mの円墳であることが確認された。調査報告については概要報告書と松山市が発行している平成11年度埋蔵文化財調査年報（以下、年報という）で概略が報告されているのみであった。それから20年近くたった今、当時の調査担当者は不在のまま報告書作成作業を行ったものである。報告書作成にあたり、遺構原図の整理と遺物の確認や実測作業から開始した。年報の石室の説明には羨道、前庭部、墓道といった記述があるが、遺構図や土層図に説明との不合理が生じている場合などは、若干の記述の訂正や削除を行った。遺構説明などの内容については、概要報告書と年報の記述にできるだけ従った。以下、報告書編集作業にあたり気付いた点を記する。

（墳丘）

墳丘土層図の整理作業では、表土、盛土、地山層などの確認作業から始めた。墳丘トレンチの土層図は、上層から掘削下面までの地山層と思われる層も詳細に分層されていた。しかしながら図面上に表土、造成土、盛土、地山などの表記がなく盛土層や地山層の分別が難しく分層が困難を極めた。このため、記録写真から情報を得ることとし、墳丘盛土下に旧表土層と見られる黒色土層が写っていることを確認した。図面上でこの黒色土層の確認作業を行い、盛土と地山層の区別を行った。この黒色土は北側では削平され、南側では比較的良好に残っていたようである。

年報には､墳丘ベルトの土層観察より盛土が良好に遺存し墳丘造成の工程が詳細に記述されている。しかし、石室の状況説明には墳頂部に陥没痕跡が有り、石室内に石材の崩落が認められるが天井石が見つかっていないことも記述され、さらに石室も壁体が１段～３段程度しか遺存していない。また、調査前の写真には墳丘上に石室の壁体と思われる石材や祠が祭られている。これらのことを踏まえて土層図を見る限り、北側の墳丘は盛土や地山が現存する壁体のレベルまで削平され、南側に一部の盛土が遺存していると考えるほうが自然であろう。よって、調査前の墳丘は大部分が後世に造成された封土の可能性が高いと考えられ､今回の報告書には確実に盛土と考えられる層だけに網掛けを行った。

（周溝）

周溝については、年報で盛土を切って掘削されているとの記述がある。周溝については、盛土を施したのちに掘削することは合理的ではないことから、10年度のトレンチ調査の墳丘土層図の精査をした。その結果、石室の北側と西側に地山を掘り込んだ周溝と見られる土層を確認し、東側では確認できなかった。このことから、周溝は全周せず南東部は途切れるものと考えられた。

（羨道、前庭部、墓道）

年報には羨道、前庭部、墓道の記述が見られ、それらの土層堆積状況から３回の追葬が想定されているが、羨道部、前庭部、墓道などはっきりとした区別がなされていなかった。羨道部には３層の堆積層が看取されるが、羨道部を構成する石材の抜取痕跡を切っていることから、より新しい時期の掘削痕跡とも考えられる。前庭部については、羨道部の入り口と墓道と思われる溝状の接続部付近を前庭部とした。

（玄室内出土遺物）

玄室内からは、耳環３点、管玉３点（1 点はガラスの再生品）、切子玉１点、鉄鏃、刀子４点、人骨などが出土している。このうち、刀子２点には鉄器の保存処理中に見つかったもので刃部に錆化したハエの囲蛹殻が見つかり、刀子が埋葬された人物に密着していたことを示すとともに「モガリ」を想起させるものといえる。松山市では、葉佐池古墳の人骨に付着していた囲蛹殻に次いで２例目の発見である。土器類は、須恵器の破片３点しか出土していない。このことは、追葬による片付けなどにより外部に持ち出されたものか、盗掘により失われたものかは不明である。

（前庭部出土遺物）

羨道部入口の東側で有蓋高坏が蓋を外した状態で並んで出土している。高坏の身には小石が一点入れられていた。年報には、追葬段階の祭祀儀礼の遺物と記述があるが出土状況の写真を見る限り埋土は安定しており羨道部構築時の埋土に覆われているように見える。このことから、石室構築時の祭祀遺物とも考えられる。いずれにせよ、古墳の時期決定に有効な資料で高坏の形より TK43 型式と考えられ古墳の年代を６世紀後半とした資料である。

（埴輪）

遺物の整理中に円筒埴輪片が 100 点ほど見つかった。ほとんどが古墳の南西部で出土していることから、７号墳に関係しないとの判断から概要報告、年報にも出土の記述をしなかったものと考えられる。７号墳の南西約 24m には、昭和 52 年に調査され三累環頭太刀が出土した１号墳が所在する。この古墳も基底石が残る程度でひどく壊され土器類の出土も無かった古墳である。調査記録によれば１号墳に伴うものとしての記述は無いが古墳の北側で埴輪の出土が記録されている。つまり１号墳と７号墳の間に埴輪片が散布している状況を示している。おそらく、どちらかの古墳には埴輪が使用されたものと考えられる。

以上、本報告書編集にあたり、概要報告や年報などの概略だけでは調査が完了していない事をしみじみと感じた。調査担当者が転職や退職を迎えることを考えれば、調査終了後に報告書作成に向けた遺構図や遺物出土状況などの調査内容についての精査を行い、数年後には報告書が刊行できる体制を整えるべきであろう。報告書刊行の時期が遅れることもあるものの、日々の整理作業は確実に積み重ねていくことが大切に思える。調査に携わっていない者の編集作業には限界があり、調査で得られた貴重な情報を生かしきれないのが実情である。ともあれ、今回の調査では、玄室内から出土した刀子の刃部にハエの囲蛹殻が付着することや、石室前庭部における高坏を使用した葬送儀礼にまつわる資料を得ることができたことは貴重な成果であった。なお、申請者の協力と理解を得て、原位置を保っていた石室は破壊されず保存されている。

写真図版

図版1

1. 調査地遠景
（北東より）

2. 調査前状況
（北より）

3. 表土及びトレンチ掘削状況
（南より）

図版２

1. 作業風景
（東より）

2. 北西部周溝検出状況
（西より）

3. 北西部周溝掘削状況
（西より）

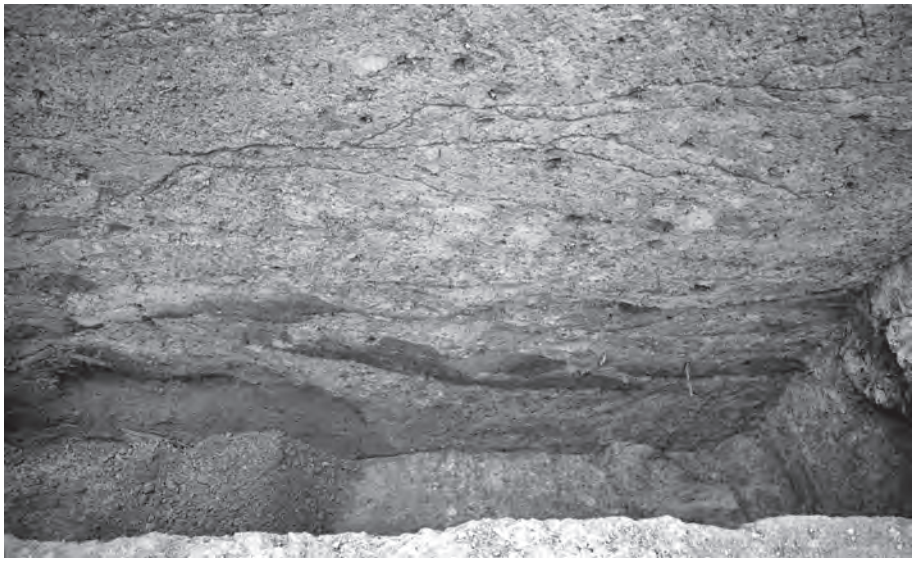
1. 墳丘北東部掘削状況
（北東より）

2. 墳丘部土層堆積状況
（東より）

3. 墳丘東側土層堆積状況
（西より）

図版4

1. 墓坑南西部検出状況
（南より）

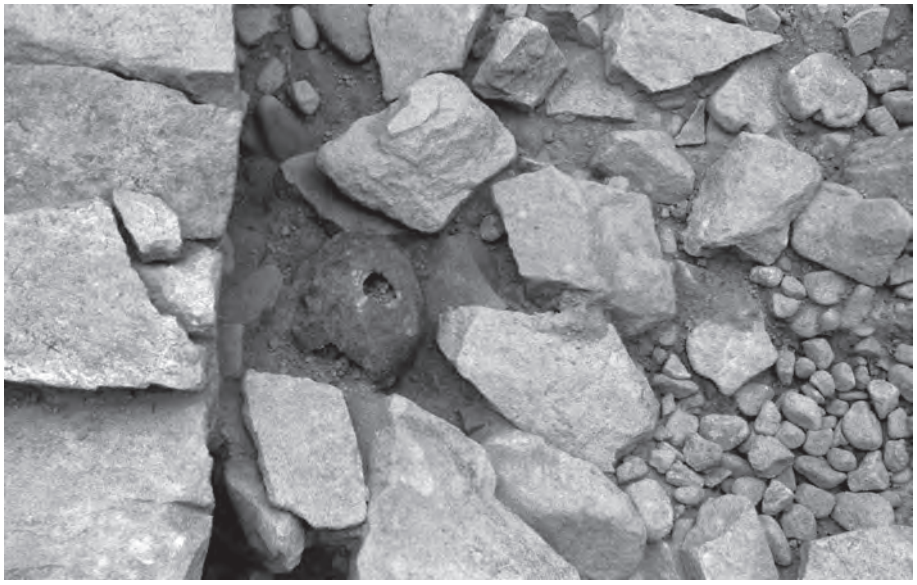


2. 墓坑埋土堆積状況
（南より）

3. 墓坑東側検出状況
（南より）

1．石室検出状況
（北より）

2. 石室内掘り下げ状況
（北より）



3．頭骨出土状況
（北より）

図版６

1. 耳環出土状況
（南より）

2. 玄室床面検出状況
（南より）

１. 床面検出状況
(北より)

２. 礫の堆積状況
(北より)

図版８

1. 羨道部入口の土層堆積状況
（南より）

2. 羨道部検出状況
（南より）

3. 羨道部入口の須恵器出土状況
（南より）

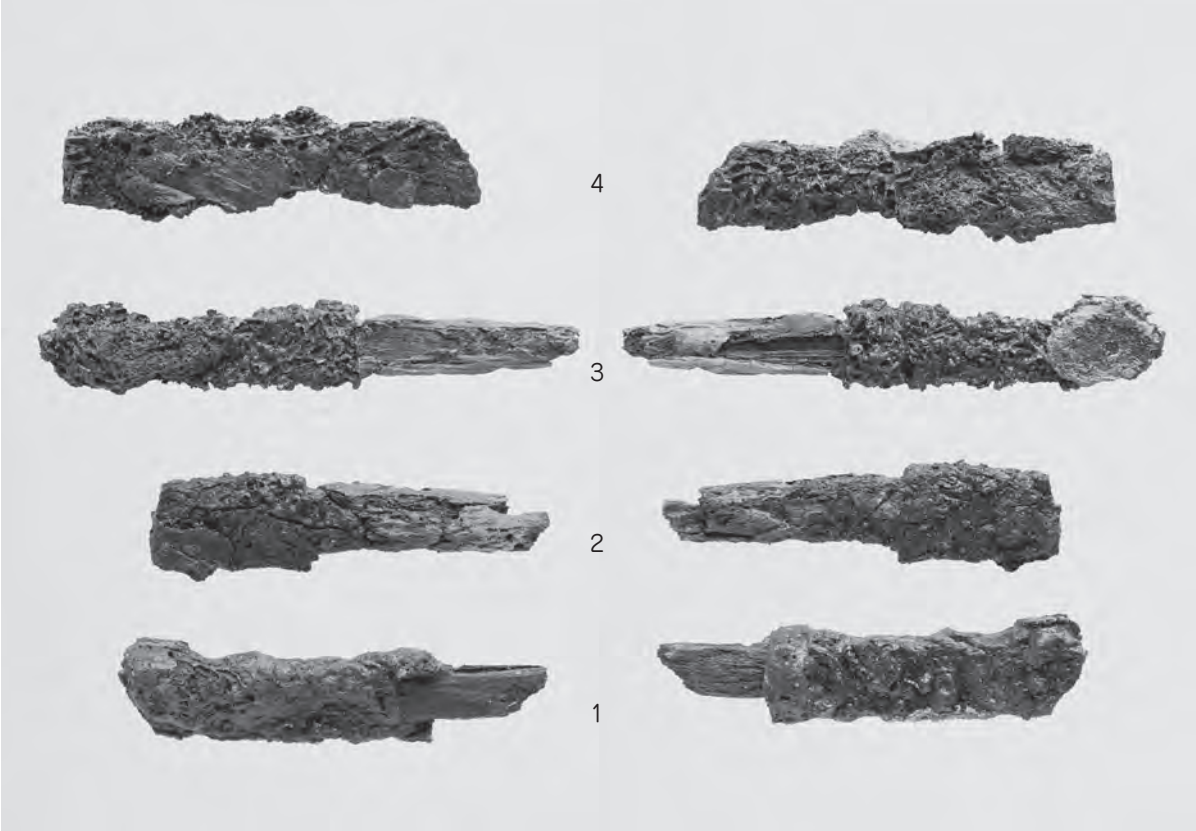
1．玄室完掘状況（北より）

2. 羨道部完掘状況（南より）

図版10

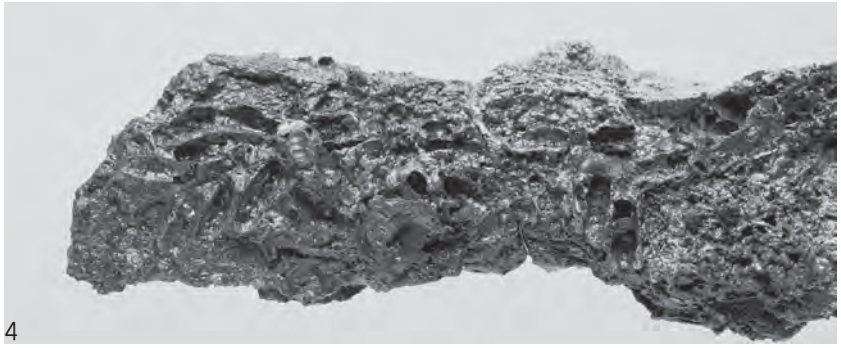
1. 石室・墓道完掘状況
（南より）

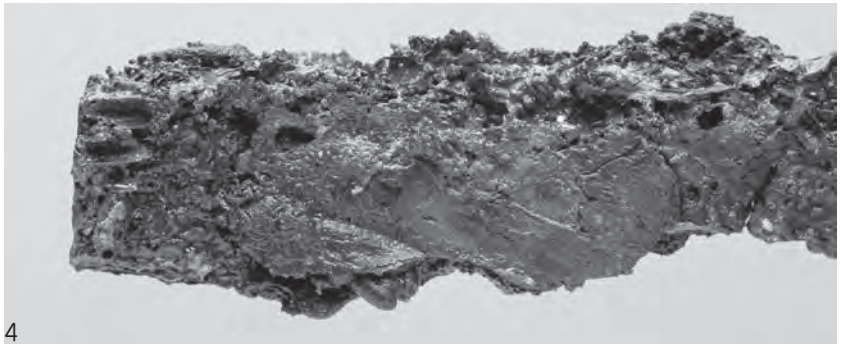
2. 五郎兵衛谷7号墳全景
（南より）

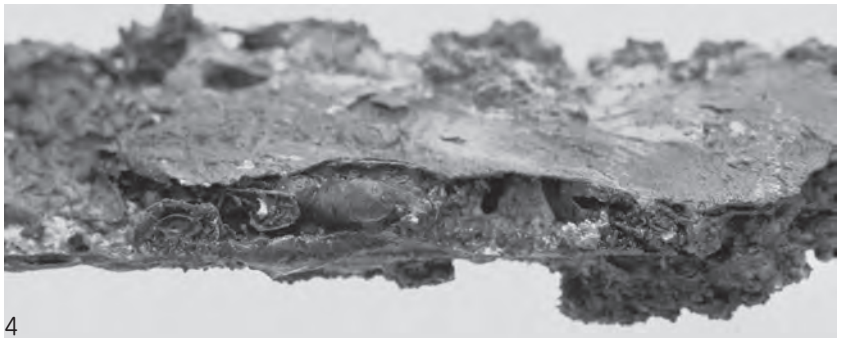


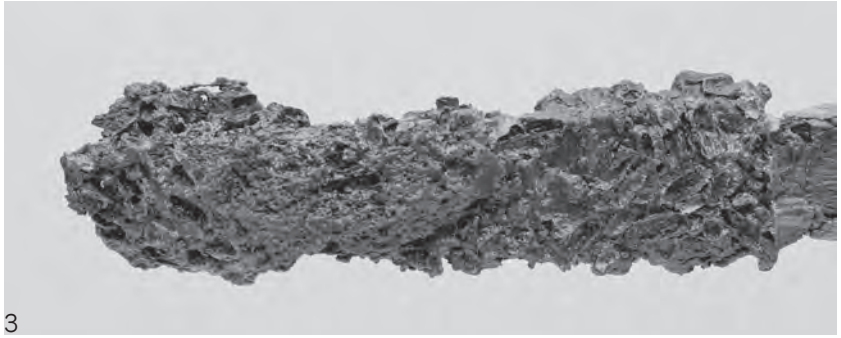
1．玄室内出土遺物（1～6･8～21）

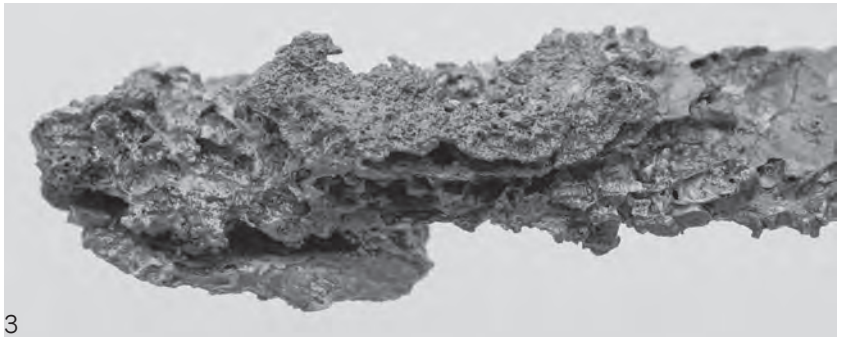
図版12



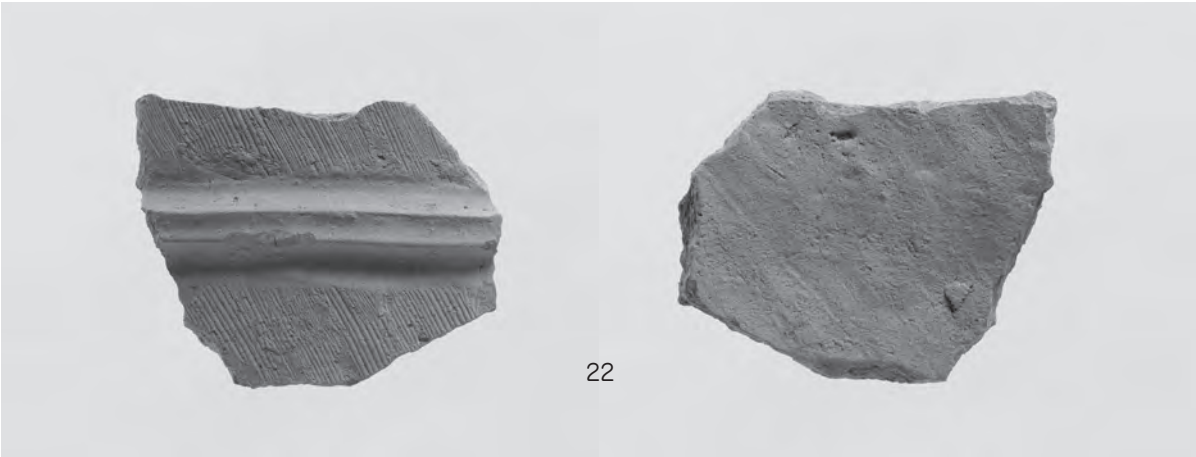


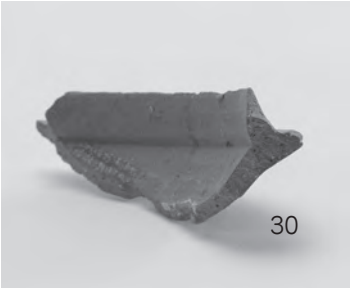






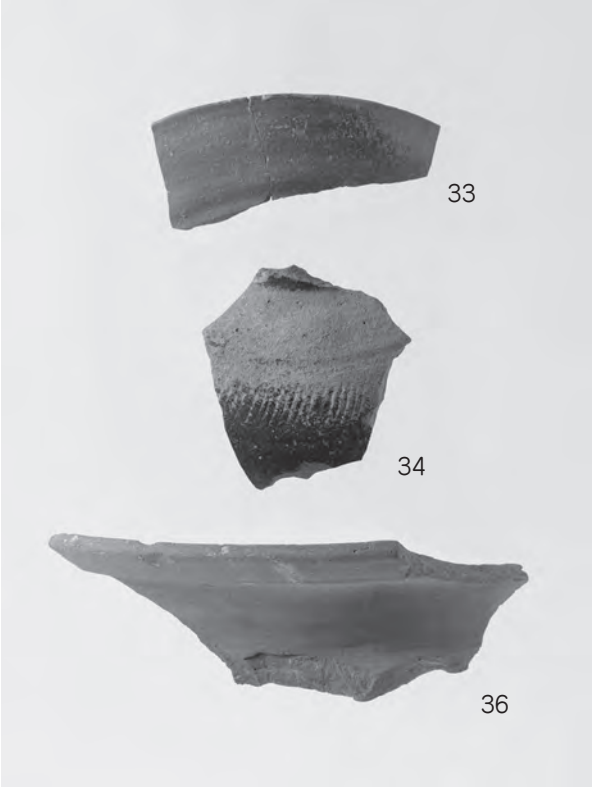
１．刀子に付着する囲蛹殻（いようかく）と布（3･4･14）

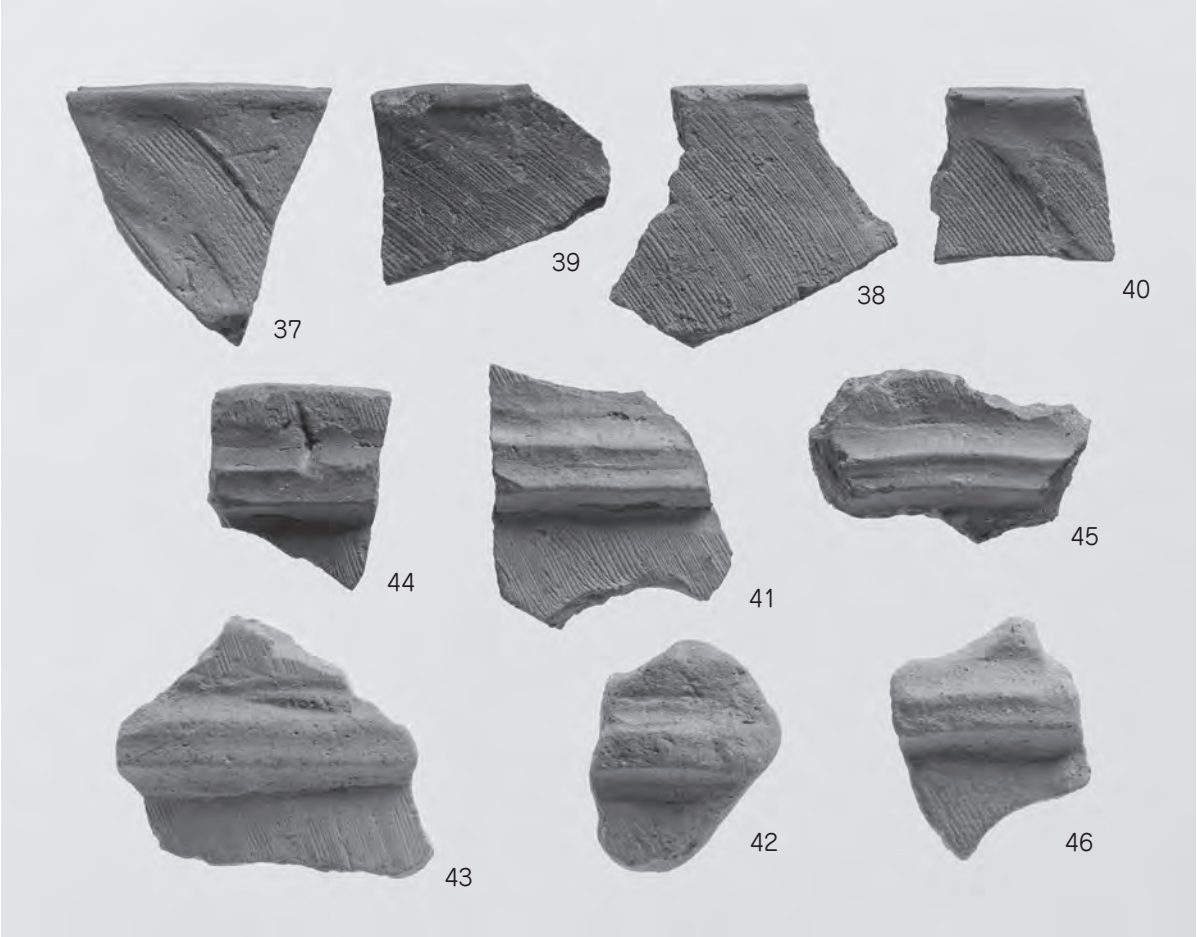




1.玄室内出土遺物（22）、墳丘・表採遺物（23～32）

図版14





1．墳丘・表採遺物（33～46）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ごろべえだに
書名	五郎兵衛谷７号墳
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第201集
編著者名	相原浩二
編集機関	公益財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　愛媛県松山市南斎院町乙67番地6　TEL 089－923－6363
発行年月日	西暦2021（令和3）年3月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
ごろべえだに 五郎兵衛谷 ７号墳	まつやましたかのこまち 松山市鷹子町 乙402番5	38201	342	33°49′ 06.32″	132°48′ 48.39″	19980825 ～ 19990630	491	農地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五郎兵衛谷 ７号墳	墳墓	古墳	両袖式横穴石室	耳環・管玉・切子玉・刀子	刀子にハエの囲蛹殻が付着する

要約	調査では、古墳時代後期の古墳１基を検出した。五郎兵衛谷７号墳は、周溝を伴う円墳で主体部は両袖式の横穴式石室である。築造時期は、前庭部から出土した高坏より６世紀後半と考えられる。このほか、玄室内から出土した刀子２点にはハエの囲蛹殻とみられる付着物が看取された。松山市では葉佐池古墳に次いで２例目である。

松山市文化財調査報告書　　第201集

五郎兵衛谷7号墳

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2021年3月10日　発行

編　集　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー
〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923－6363

発　行　松山市教育委員会
〒790－0003　松山市三番町六丁目6番地1
TEL（089）948－6605

印　刷　岡田印刷株式会社
〒790－0012 松山市湊町7丁目1－8
TEL（089）941－9111（代）